

教師 という 仕事

－ 教師 論 －

中井 睦美

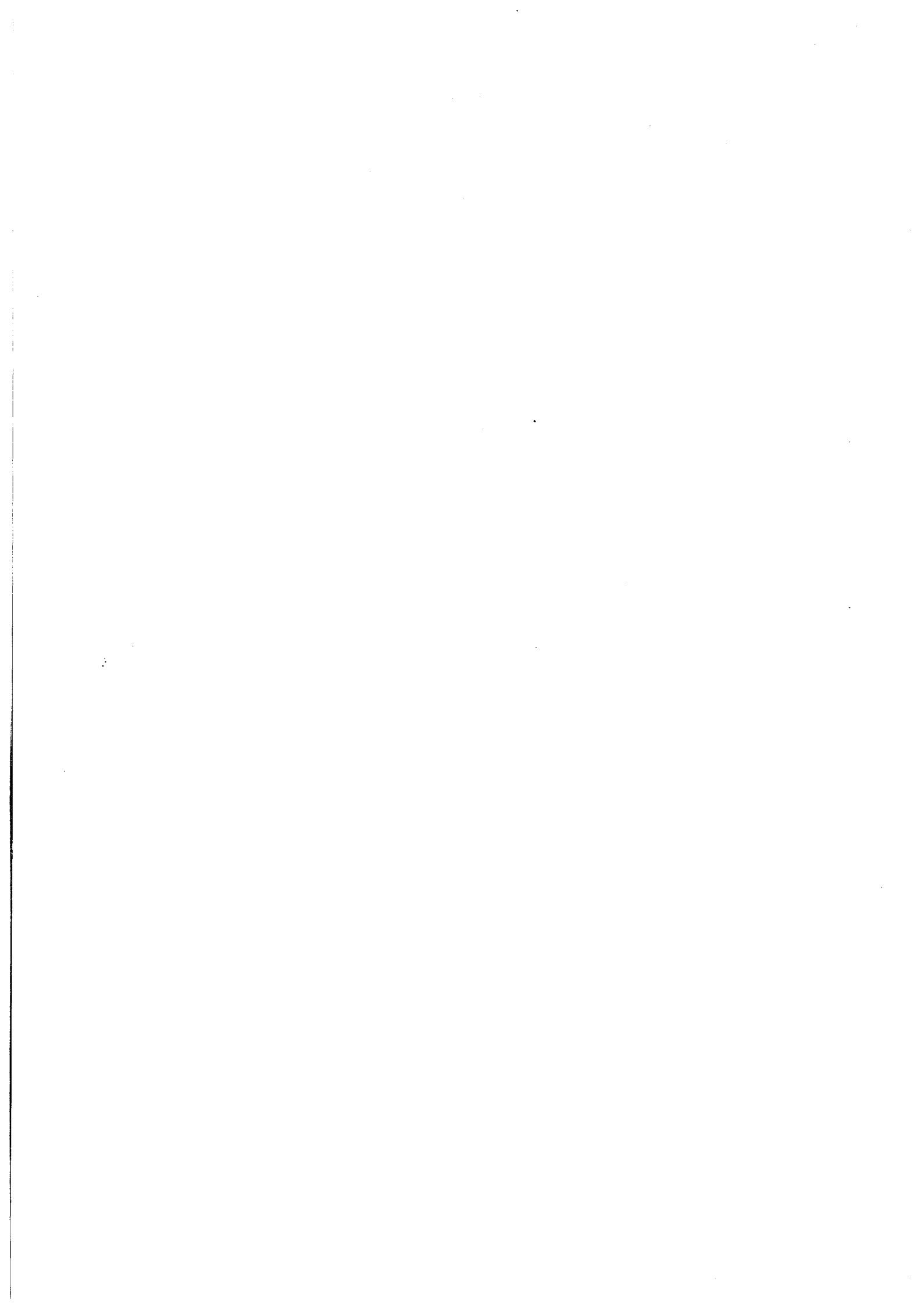
教師という仕事

－ 教師論 －

中井 睦美 著

目次

- 教師論 1. あなたは今教師になりたいと思っていますか?(1)
- 教師論 2. 学習指導案を作る意味・年間指導計画を作る意味.....(5)
- 教師論 3. 一般人の常識・社会人の常識・教師の常識・そして、あなたの所属する学校の常識···(10)
- 教師論 4. であう生徒たちの可能性を信じよう.....(14)
- 教師論 5. 教師になるあなたに専門教科があるという意味.....(18)
- 教師論 6. 正確な知識を伝える授業と生徒自らに考えさせる授業.....(22)
- 教師論 7. 即効性のある学びと、10年後の成長のための学び.....(27)
- 教師論 8. 教科書の指導書(教師のマニュアル)を活用しよう.....(30)
- 教師論 9. 教師は万能ではない。生徒は自分の思うようにはならない.....(32)
- 教師論 10. 一人で解決しようと悩まない。他の教員に相談しよう.....(35)
- 教師論 11. 新聞に載るような社会問題、特に教育問題については知るべきである.....(39)
- 教師論 12. 生徒のおかれている環境と実態を理解すること-簡単に決めつけないで-(41)
- 教師論 13. 学校・教師の説明責任(アカウンタビリティ)をどう考える.....(43)
- 教師論 14. モンスターペアレントなんて怖くない?!本当にその保護者はモンスター?...(46)
- 教師論 15. 教師は踏み台である。見返りを求めてはいけない.....(49)



教師論①：あなたは教員になりたいと思っ ていますか？

あなたは今教師になりたいと思っ
ていますか？「絶対先生になろう」とか、「先生になる為に大学に来た」という人もい
るでしょう。それとも、家族や高校の先生に「教師になったら良いのじゃないか」と
言われて、この授業をとるようになったのでしょうか。おそらく確固として教師に
なりたいたいという人と、人に薦められたからとか大学へ来た以上何か資格が欲
しいからなどと言う人は、半々程度でしょうか。いや、何となく教職課程を履修
したいと思う人の方が多いのかもしれない。私たちは2015年から2016年にか
けて、教育学系・それ以外の文系・理工系の大学生を対象に教職課程についてのア
ンケートをしました。OECDのTALISという国際教員指導環境調査から一部を利用し
て調査したのです。予想通りに、教育学系の学生は教員になろうというモチベー
ションの高い人が多く、教師という仕事について「やりがいのある仕事だ」とか
「次の世代に影響を与えたい」と思っている人が多いという結果になりました。そ
の他にも、教育学系の学生には、入学前から「子どもがすきだ」と思っている人
が多く、学校というところに良いイメージを持っている人が多いようです。一方、
理工学部や文学部の人には、教師という仕事にそれほど思い入れはなく、「大学で
学ぶ専門教科の学問を行かせる場」と考えている学生も多いようです。私はど
ちらがよいとも言えないと思っています。というのも、学校は社会の縮図であり、
色々なタイプの先生がいることが、学校を豊かにし様々な子どもたちが受け
入れられやすい環境を作っているからです。

近年、教師という仕事の質が、相当変わってきました。あなたたちの周囲の年
長の人には、「教員免許なんて大学に通っていればすぐとれるのだから、取らな
ければ損」と考えている人もい
るでしょう。私の手元に私が大学に通いながら取得した教職課程の成績表が
残っています。それを見ると、専門の授業の他に教職に関係する科目は、教育
学概論などたった12単位程度で、あとは教育実習だけでした。今は24~26単
位もあります。それだけ、教師という仕事が大変になってきているのでしょ
う。過去10年程度の間でも、社会の教師に対する目が厳しくなり、要求さ
れる事も多くなってきています。前述のTALISでは、日本で行われている様
なクラブ活動や生徒指導の忙しさは問われていません。しかし、日本ではこ
ういった業務が教員にとって多くの時間をさく事となっています。さら
に近年では、保護者と関わる業務が、教員の仕事の一つとして、多くの時
間と、精神的圧迫感を与えているようです。一方で、本来中高の教員にと
って一番大切なはずの授業を教える教科の専門知識と教科に対する深い洞
察力や考える力、そしてそれを生

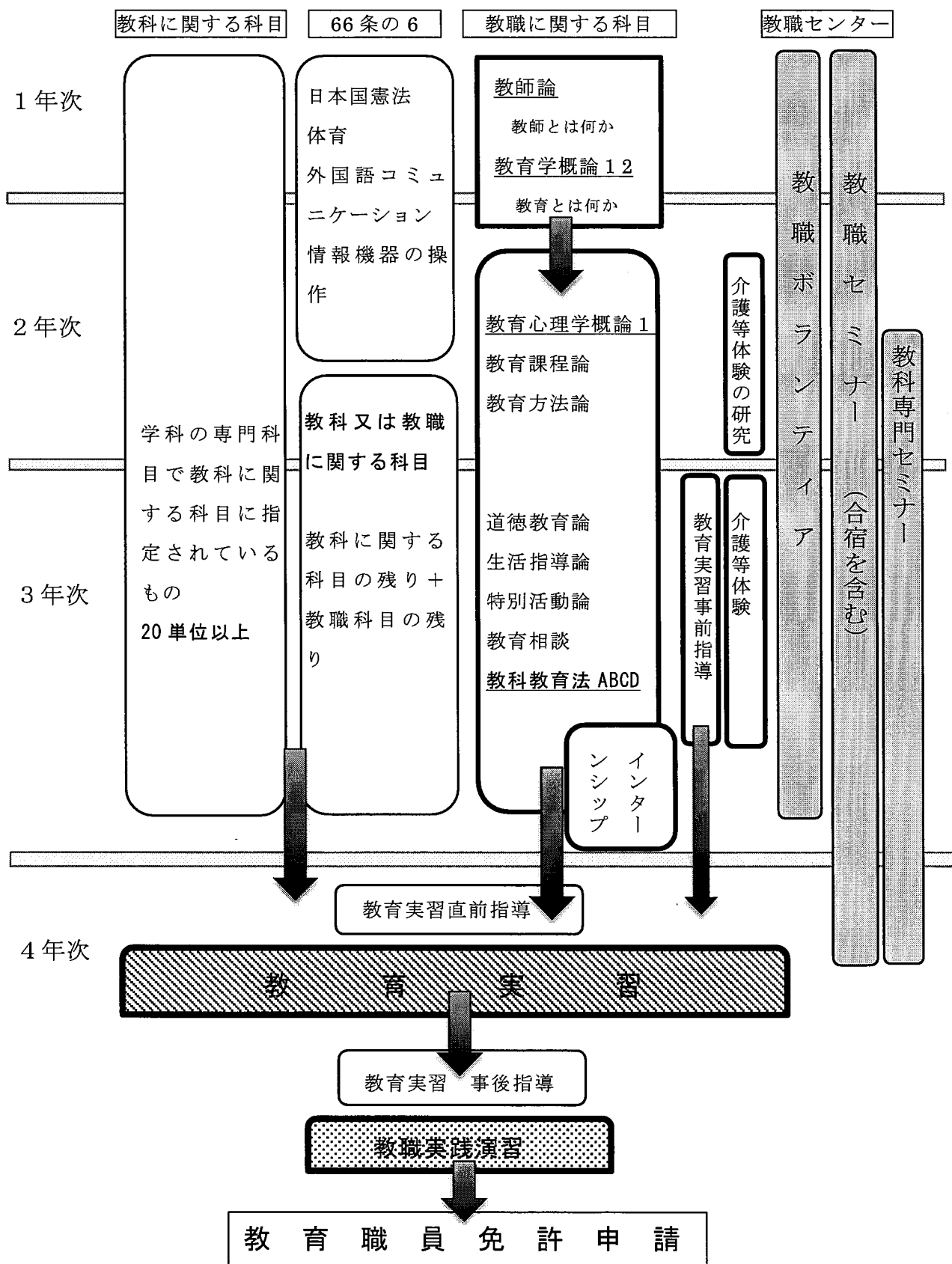
徒に伝えていこうという熱意（気をつけてください。教える技術ではありません。）が低下している様に思えるのは、私だけでしょうか？

ともあれ、学生諸氏が考えている教師と実際の教師の仕事とは、相当かけ離れている様に思います。それをできるだけ伝えて、教員になる心の準備をしてもらおうというのが教師論の授業です。始めは、教育職員免許（通称教員免許）を取得する為に本学ではどのような授業をとらなければならないか、その授業でどのような事を学ばなければならないかを講義いたします。この教職課程のカリキュラムを図にしたのが、カリキュラムツリー（p.3）です。この図にあるように、本学の教職課程は教師論の授業で始まり、多くの授業を履修したあと教育実習に行き、総仕上げで教職実践演習で修了して、教員免許の申請をする事になります（大学が一括申請します）。従ってこの3つの授業は、4年間の教職課程の要となる授業です。教職実践演習の授業は基本的には教育実習の振り返りなので、教育実習が教職課程の最後のゴールといってもいいでしょう。教師論（教師とは何か 教師の仕事とは何か）という授業で教職課程は始まり、様々な授業で教職や教育について学び、教育実習＋教職実践演習で修了するという訳です。

教師論の修行では、教員という仕事をよくわかってもらう為に、新聞記事や雑誌の特集など、現代の学校現場の問題点をあつかったものを元に、班で色々な意見を出し合っ
て議論をして考えを深めてもらおうと思っています。また、多くの人の前でそれらの意見についてまとめて発言をしてもらう事も考えています。しかし、4年後には忘れて
いる事も考えられますから、教育実習に行く前に、この冊子（プリント）は必ず読み返
してください。

また、介護実習・ボランティア・インターンシップ・教育実習などに、外の施設や学校
に行く時には、学生諸氏は様々な壁にぶつかります。そのことについて、コラムとして
破線で囲って、章末に書きました。どれも本学で実際に起こった事ばかりですので、実
習に行く前には必ず目を通してください。

教職課程カリキュラムツリー



* アンダーラインをしてある科目の取得と、教育実習事前および直前指導野受講が教育実習を履修する要件です。

教育実習の誰にも聞けない疑問に答えるコラム

学習指導要領・教科書ってどの程度重要？

学習指導要領は、文部科学省によって、小・中・高校で教える内容について定められたもので、ほぼ 10 年おきに改訂されています。それぞれの時代において強化される教育内容が変化し、政府の教育理念が色濃く反映されます。教科の基本的な時間数もここで設定されます。文部科学省の検定教科書は、この学習指導要領をもとにして作成されています。特に公立の義務教育である小・中学校の授業は、この教科書に準拠することが求められます。検定教科書は何社からも出ているのですが、義務教育の小・中学校では教科書は無償なので、お金を出さず地方自治体がどの教科書を使うかを決定します。公立の小・中学校の教師には、教科書を選択する権利もないのが普通です。一方、教科書が有償の高校や、私立国立小中学では、教科書は学校ごとに教員が選び、選択されています。また高校や私立国立小中学では、教科書を使用しない授業をしているところも少なくありません。それでも、学習指導要領の教育内容は守られていますし、生徒に検定教科書を購入させて、その内容は理解しておくように指導しています。

従って、教育実習生の皆さんが、実習前に必ず行わなければならないことは、まず、自分の教える教科（高校では教科と科目は明確に異なるので注意！！）の学習指導要領の内容を良く理解するということです。次に重要なのは、授業を組み立てる時には、教科書や指導書を利用するということです。教える内容を大別した単元は、学習指導要領に明記されているのですが、教科書はほとんど単元ごとに章立てされていますから、これをもとに授業を組み立てれば、特に義務教育である中学では、ほとんど間違いはありません。しかし、教科書を組み直して教えている高校や私立国立小中学で教育実習する場合は、そう簡単にいきません。というのも、生徒は教科書を持って学校にくる習慣がないからで、教科書にあたる資料を教育実習生が作らなければならないからです。つまり、学習指導要領を良く理解した上で、教材を集め、その学校の生徒の現状をふまえながら、学習指導要領の内容にふさわしい教科書を作ることまで、教員には求められます。そういった学校で教育実習をする場合は、指導教員とよく相談して、授業内容を決めてください。学習指導要領をもとにして、教科書を作ることができてはじめて、プロの教員と言えるのかもしれませんが、ああ、本当に、一人前の教員になる道は険しいですね。でも、何事も勉強と練習です。

教師論②：学習指導案を作る意味・年間指導計画を作る意味

みなさんが4年生になると教育実習に行きます。教育実習といえば、「指導案が書けるようになりなさい」と言われます。また指導案が書けないと、教育実習先で、「指導案も書けないなんて」と、教師としての人格を否定されるような目で見られます。それでは、この指導案とは何なのでしょう。

指導案とは正式には学習指導案といい、1回の授業を進めてくための計画書のことです。あなた自身の生徒を観察する目・評価する目、教材を理解する専門家としての力量、生徒集団と教材を理解した上で、どのような授業展開を考えられるかという教師としての力量が、数頁の学習指導案の中で公にされます。その資料を見つつ、実際の研究授業を見ながら、授業観察者（同僚や上司、指導する教員など）は、あなたの教えたことを理解しようとし、教師としてのあなたの力量を見る訳です。教育実習の研究授業の場合、指導案がどれほど大切なものか、理解できたでしょうか？

実は指導案には、こうしなければならないという定式はありません。しかし、大まかの約束事があります。この文章とは別に、いくつかの学習指導案の例を配布いたしますので、それぞれの教科別に参考にして、自分の指導案を作成してみてください。インターネットでも、大学や教育委員会が、それぞれの考え方に従って作成した指導案を公開しています。地方自治体によっては、もっとも実習生の多い大学や教育委員会の雛形が一般的になっているところもありますから、インターネットで公開されているようなら、手に入るとよいでしょう。

定式はきまっていないものの、公式文書ですから、指導案に書かなければいけない内容はほぼ決まっています。あくまでも1回の授業を「指導者（同業の教員）」としての立場で見学する人たちが、授業を観察するための計画書ですから、見てくださる相手のことを考えて書かなければなりません。逆に言えば、指導案を書くチャンスというのは、教育実習の研究授業と、その後教員になってからの学校内外で行われる研究授業の時のみ、ということになります。同じ公開授業でも、保護者授業参観日の様な時には、指導案は書きません。極端な場合、教育実習で書くのが最初で最後ということもあります。

一方、年間指導計画というのは1年間の学習計画のことで、教育実習の時に作ることはないのですが、すべての教員が作成し、4月最初に校長や教頭などに提出しなければならないものです（学校によって多少の差はあります）。どういうものか見

当がつかない人は、大学の HP からあなたの履修している授業のシラバスを見てみてください。毎回の授業で何をすることが書いてあるでしょう。あれに日付が入ったものが年間指導計画だと思ってください。教員になったら、学校で提出を義務づけていようがいまいが、年間指導計画を作らなければ、与えられた授業時間内で学習指導要領や教科書にある内容を教えきることはできません。特に中高では、1週間に与えられる授業時間は1クラスあたり2-3時間が平均でしょう。授業内容をまとめなければならない中間・期末試験までの1クラスの総時間数は8-12時間程度のこともあります。行事が入ったら2時間減少するというのも普通です。数クラス担当している場合には、試験までの総時間数は、クラスによって2時間程度増減します。試験までにはどのクラスでも同じ内容を教えきらなければならないので、年間指導案が極めて重要な事がわかるでしょう。

教師は、各クラスの試験までの総時間数を比較しながら、クラスによっては同じ内容を1時間多くかけたり短縮したりできなければなりません。年間指導計画を立てる時には、そのあたりも配慮します。クラスごとの教授内容のバランスが悪いと、生徒や保護者のクレームの原因になります。

ここで若干寄り道して、試験・成績と授業内容との関わりについて述べます。中間・期末試験が、数人の教員の授業の統一テストの時には、授業内容により神経を使う必要があります。というのも、統一テストでは、クラスの力の差が露骨に現れるからです。生徒の気質などに原因することもあるれば、教員の教え方に原因があることもあります。良かれと思って、統一試験内容と類似した演習問題をやらせてしまっただけで、あなたの持ちクラスだけ平均点が上がってしまうと、同じ学年の同じ教科を教えている先生方から袋だたきになることがあります。なぜでしょうか。中高の成績は、中間・期末試験などの結果を基準に評価され、教科の会議で検討され他の先生方の意見も取り入れた上で、成績会議で全専任教員や校長などの承認を受け、はじめて本人に知らされます。この成績をもとに推薦入学生が選ばれるなど、生徒の将来が決まってしまうため、中学高校内での成績には、高い公平性が求められます。成績が良いクラスの教員は、生徒や保護者の人気が高くなるので、新人教員は、ついつい統一試験内容と類似した演習問題を繰り返しがちです。しかし、それでは事前に試験問題を漏洩していると同じことになります。それぞれのクラスの限られた数時間で何をどこまで授業できるかが、中高教師の力量の一つと見られているわけです。

年間指導計画とは、1年を通して何に重点をおいて教育したいかという、教師の教育スタンスがすべて現れるものです。1時間1時間が真剣勝負という現場では、

貴重な数時間をうばう教育実習生は、本当のことを言うと歓迎されていません。現実問題として、教育実習生が帰ったあと、担当（指導）教員のほとんどが、もとのルールに戻るように、かつ、中間・期末試験に間に合うように、大急ぎで授業をやり直します。みなさんは、その貴重な数時間を譲っていただいているのだということを感じ、担当（指導）教員の年間指導計画を良く理解し、あまり外れないようよく話し合い、教育実習を行ってください。自分の教育理念を実現するのは、現場の教員になって自分の年間指導計画をたてるようになってから、焦らず、着実に、実行していくのがよいでしょう。

以上のことから考えると、実際に中高の教員になった日常では、学習指導案より年間指導計画の方が重要であることが、おぼろげながらわかるでしょうか。しかし、学習指導案を書かなくなったからといって、毎回の授業内容の計画がいきあたりばったりで良いわけではありません。学習指導案を書く代わりに、クラスごとの指導内容に漏れがないように、板書事項や説明内容をきちんとノートにまとめていらっしゃる先生は、よくいらっしゃいます。毎回の授業のたびに、今日はこの順でこう授業するという計画は、いつも頭の中では繰り返されているはずですし、いくつかのクラスで同内容の授業を繰り返す時には、うまく行かなかった部分を手直ししながら、計画を練り直しているはずですよ。

★学習指導案に書くべき内容（項目のみ）

学習指導案は、その単元（学習指導要領に規定されている区分で、教科書の章がこれに対応することが多い）全体の中で、指導案を作っている研究授業がどの部分にあたるかを明確にし、指導計画を書くべきです。以下に主な内容を列挙します（詳しい例は3年次に別途印刷物が教職課程センターからわたります）。

○○科 学習指導案		
	指導教諭	印
	教育実習生	印
1. 日時 ○○年○月○日() ○校時 ○時○分～○時○分 2. 場所 ○年○組教室など 3. 学級 ○年○組 (男子○名、女子○名) 4. 単元名 ×××× (教科書名 ページ) 5. 単元設定の理由 (教材観・教材の系統観・児童生徒観・指導観などでもよい)		

- 6. 単元の目標
- 7. 指導計画 ○時間（総時間）
 - 2時間
 - △ △ 1時間（本時）
 - □ 2時間
- 8. 本時の主題
- 9. 本時の目標
- 10. 授業の用意 プリント ○○教科書
- 11. 本時の展開（指導過程）

時間		
○分	表にしてまとめる。授業内容・生徒の学習内容など必要に応じて欄を増やす	

↑ 授業者のセリフなども書く

↑ 予想される生徒の
反応

- 12. 評価

どうですか？大変そうですか。指導案は、3年次の教科教育法などできっちり指導してもらえるとと思いますが、教育実習中はこの作成が相当大変であるということは、覚えておいてください。

教育実習の誰にも聞けない疑問に答えるコラム

自分の教壇実習内容ってどの程度勉強すればいいの？

ここまで勉強すれば充分といった約束事があるわけではありません。とほいうものの、教える部分の教科書を読むだけというの、あまりにも安易です。指導書がある人は、指導書には目を通しておきましょう。関連する参考書や、専門図書数冊を読むくらいの準備が必要です。というの、持っている知識をすべて授業で伝える訳ではないのですが、生徒の質問には答えられる様な準備をするべきだからです。まして、教育実習で研究授業をする場合は、事前に専門教科の指導教員と内容について話し合

う訳ですから、専門知識が何もないようでは、話し合いにもならないからです。また、研究授業後の教員どうしの講評会では、予想しない様な質問が出てきますので、備えはかかせません。

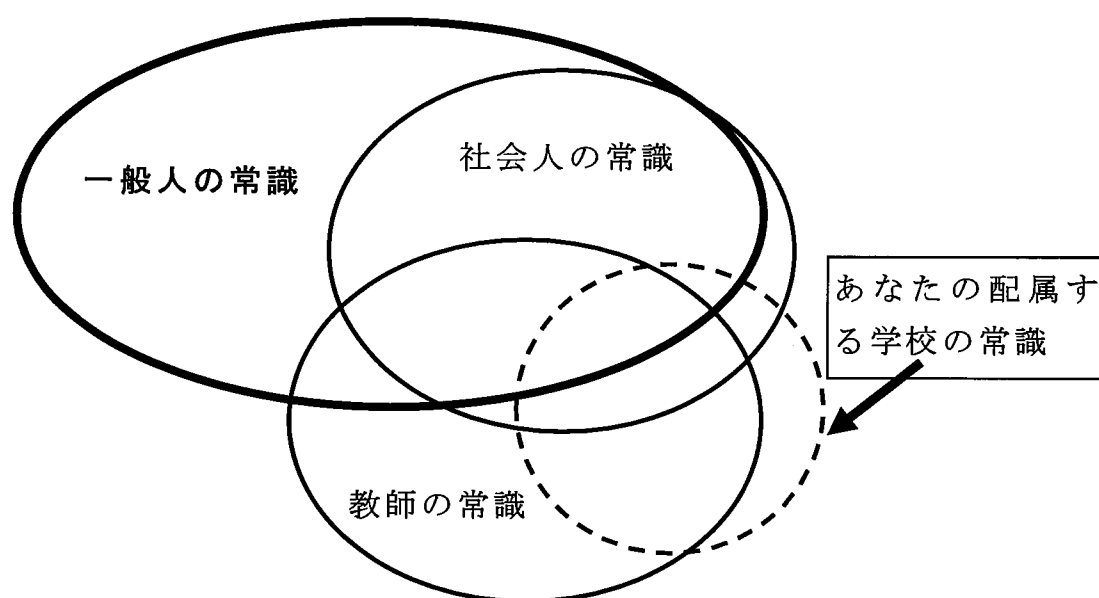
また、どんなによく知っている分野でも、知識に間違いがないように、教科書の字が読めなかったりしないように、確認のための下調べが必要です。ノートを作って、幾つかの色ペンで記入しておくのも、ひとつのやり方です。例えば、板書事項は黒、話す内容は青、注意事項は赤、質問された時のみ答える内容は緑といった具合です。

中高になるとその教科に特定の興味を持っていて毎時間質問してくる様な生徒が現れます。うるさがらず丁寧に対応してあげることが大切です。たまに、教育実習生を困らせるために、徒党を組んで、毎回質問攻めにするといったクラスも出現しますが、生徒もそれだけ下調べをしてくるのですから、大いに歓迎してやりましょう。生徒の質問を恐れることは何ともありません。あなたの方が専門家ですし、先輩なのです。問題は質問された時の対応の仕方です。重要なのは、間違った答えをしないようにすることです。わからなければ「すぐ答えられないから、調べて確認してくるので」と答えておいて、次の授業までに必ず答えを用意してくる事です。きちんと対応すれば、生徒たちはちゃんとしてきます。教師になってしばらくすると、こういった質問や反応の多いクラスの授業が、楽しくなってきます。そうなったら、あなたも一人前に近づいたということでしょう（えらそうに書いていますが、かくいう私も、いまだに一人前の教師の領域に入っていないと感じています）。私語が多くて収集がつかないクラスでは、授業中の面白い反応は出てこないものです。質問や反応の多いクラスというのは、授業を聞く体制ができている楽しいクラスなのです。私の中学の担任だった数学の先生は、のちに教頭先生になりましたが、その時はバリバリの新人でした。後のクラス会で次のようにおっしゃっていました。「あなたたちの学年は、うるさいと言われ、他の学年の先生には不評だったけれども、私の大好きな学年だった。あなたたちとの授業は、毎日が真剣勝負で緊張の連続だった。どんな質問がでてくるか、どんな新しい解き方がでてくるかわからなくて、よしっと思って職員室を出た。あんなに面白い学年には、後から一度も出会ってない。本当に楽しかった。」どうでしょう？ 教師としての醍醐味を感じませんか？

教師論③一般人の常識・社会人の常識・教師の常識・そして、あなたの所属する学校の常識

若いあなたたちが若者どうしだけの世界を卒業し、いわゆる就活を始めると、あちこちで大人から「常識が無い」とか「常識的に考えて」とか言われ始めます。この「常識」とは何なのでしょう。「当たり前の事」と置き換えてもいいのかもしれませんが。ところが、若者・学生どうしの常識（＝当たり前の事）が、学生以外の一般人や、社会人には通用しなかつたりします。その時に、前述の様な言われ方をします。

ある人間集団の常識とは、その人間集団の中では「当たり前」の良識ということになりますが、実は人間集団が異なれば、常識も変わってくるのです。常識の範囲を簡単に考えてみると下の様な図になるのでしょうか？



つまり、社会人の常識は一般人の常識とほぼ重なって含まれますが、教師の常識は、一般人や社会人とも重なりつつもかなりずれています。しかも、あなたが教育実習で行く学校や卒業したあと勤める学校内の常識でさえ、一般的な教師の常識とは一致せずに微妙にずれているのが普通です。ここの微妙なずれが理解できなくて苦しむ新人教員が多いようにも感じます。

少々具体例を挙げてみようと思います。働く時の服装には、その社会の「常識」が適応されます。熱中症になりそうな暑い日には一般人なら上半身裸になったり（本当はこれは逆効果ですが）、背中があいたタンクトップを着たり。ゆかたを着たりし

ます。しかし、社会人はお金をかせぐ仕事をしている訳ですから、最近は無ネクタイは許されても、襟のついたシャツとか、制服の様な作業服とかを着ているでしょう。教師はというと、女性教員はスカートをはくべしといった厳しい制約のある私立学校はまだあるようですが、保護者会でもない限り着る服には意外と制限がありません。一方で、中高の生徒には、暑い日も暑い制服を着せたり、非合理的な服装を求める事も多いのが現実です。

もう一つ例をあげましょう。一般人が身内のことを話すときは、「うちのお母ちゃんが」と言ったりします。このお母ちゃんは、本人の母親である場合もあれば、奥さんである事もあります。「マダム」にあたる言葉の無い日本では、他人を呼ぶ時に身内的な呼び方をすることがあります。道を歩いているとき販売員に「奥さん」と呼ばれたりわざとらしく「おねえさん」と呼び止められたり、その人の母親でなくても「お母さん」と呼ばれたりします。以前、選挙宣伝カーに「お母さん〇〇をよろしくお願いします！！」と言われ、私はあなたの母親じゃないと慄然となったこともあります。こんな候補者には、絶対投票するものかとも思いました。しかし、こういった感覚は、人それぞれでしょう。社会人が会社の身内を呼ぶ時には「社長が」とか「〇〇課の〇〇が」とか言うでしょう。身内のことを外部に話す時には、敬語はもちろん使いません。一方、教員社会ではどうでしょうか？完全な第三者には「校長はただいまおりません」といった社会人と同じ表現をする学校が増えてきましたが、よく知った保護者に対しては、「本校の〇〇が」ではなく「〇〇先生が」とか「校長先生はいらっしゃいません」と言う風に表現しているのではないのでしょうか。また、生徒に向かって、自分の事を「私は」ではなく「先生は」と言っている教員も見受けられます。社会人から見ると、自分の事を「先生」と呼ぶのはとても変です。しかし、一般人の母親が自分の子どもに向かって自分の事を「お母さんは」と言っているところを見ると、日本の一般常識ではそれほど不思議ではないのかも知れません。

このように所属する人間集団が異なれば、常識も異なってくるのは当たり前です。しかし、一番大きな問題は、どっぷり教員社会に浸かっていて、外を全く見ていないと、自分たちが他者からみると常識的ではないということに、全く気がつかなくなるという事なのです。学校現場もそういった状態に気がついているのでしょうか。社会人を何年か経験した教員が受け入れられています。

常識の違いについて、もう一つ例を話します。

学校は社会の縮図です。日本がグローバル化すれば、学校も当然グローバル化します。それぞれの中学の生徒向けの規則は、本来は生徒の健全な成長によかれと思

われて作られているものですが、時には管理的な物差しだけが先行し、生徒の人権を無視した管理のための管理になりがちです。グローバル化した生徒集団のなかでは、単一民族国家に近い今までの日本では考えられなかった様な、「常識」のぶつかり合いがおこります。たとえば、ほとんどの中学校でピアスは禁止なのですが、一部の国では、女子には生まれた時からピアスをさせる習慣があります。バレリーナもピアスをする必要があります。以前、もともと髪が茶色いハーフの生徒に髪を黒く染めるよう指導した教員がいたことを聞いています。理由は「一人だけ目立つのは良くない。髪を茶色くしたい生徒への影響」などでしょう。どちらにしろひどい理由です。日本の学校社会は「たこつぼ」になりやすく、他の生徒と同じようでない生徒を排除するような雰囲気があります。このことがイジメの温床にもなる傾向があります。教師が所属する学校の常識に異常にとらわれると、「たこつぼ」化を助長する事になります。

もうひとつ特筆したいのは、特に荒れている学校でおきがちなのですが、力で生徒を押さえるべく、体罰が横行する事になってしまふ、または、生徒を乱暴に扱う言葉の暴力になってしまふ事です。おそらく良心的な教員ほど苦しむ事になるでしょう。管理職がそれを容認していたりする場合もあるからです。しかし、教員は一人ではありません。一人で突っ張っても学校は変わりません。同じように考える教員と地道に身近なところから改善していくという努力が必要です。

それでは、新人の教員はどうやってこの学校の常識と向き合えばいいのでしょうか。何も考えずに周りに合わせる事だけ考えていると、すぐ世の中と隔絶した間違った教師の常識の狂信者になってしまいそうです。一番大切なのは、**あなたがどんな教員になりたいかという教師としてのアイデンティティを持つ事**です。これは、あなたの大学生時代の課題とも言えます。もう一つは、教員社会以外の人たちとの交流を大切にする事です。ただし、自分の理想の教員像を、あまりにも自分にも他の教員にも求めすぎると、理想とはほど遠い学校現場で幻滅して自暴自棄になったり、他の教員とチームワークがとれなくなったりします。ですから、**理想の教員像を胸に置きながら、「ま、いっか」とあきらめる姿勢**、といった矛盾した両面が教師には必要だと言えるでしょう。

そして、何より一番重要なのは、「生徒」を大切に思う気持ちです。現場で迷ったら、そこに立ち返る事が、大切だと思います。

教育実習の誰にも聞けない疑問に答えるコラム

教育実習には何を着ていこうか

基本的にはスーツでしょう。教育実習前の学校訪問の時には、安くてもいいのですが、スーツやA4が入る鞆が必要でしょう。いつもA4書類を折らないで持ち歩ける事は重要です。靴は、男子なら黒の革靴、女子は黒のパンプスで結構ですがあまりかかとの高いヒールは賛成できません。なま足はさけるようにしましょう。男性は黒っぽいソックス、女性はストッキングです。また、上履き用の靴、教育実習までには簡単な上履き用運動靴を用意しましょう（スニーカーというより運動靴と言った方がよいでしょう）。サンダルやスリッパを上履きに使うのはあまり賛成しません。というのも、火事や地震が起きたとき、教員は生徒を助けに、あるいは生徒を背負って移動しなければなりません。サンダルやスリッパは不向きなのです。

教育実習まではリクルートスーツで充分です。中に着るシャツやワイシャツも白が無難です。男子はネクタイをしましょう。服装だけでなく、鞆の中にはハンカチティッシュ、筆記用具（黒のボールペン、シャープペンシル、印鑑は必需品）は必ず入れておきましょう。

ただし、教育実習が始まった後は、指導教員に聞きながら、仕事がしやすい格好になってもかまいません。いつも着替えられるようにスーツを置いておいた方が、あるいは、登校下校はスーツを着ていた方がいいかもしれません。

気をつけなければならない事は、研究授業の時は、スーツを着る事です。他の教壇実習ではスーツは着ていなくても、研究授業は別です。

教員になったらどの程度洋服は必要なのでしょう。3枚スーツを買いなさいと現場教員にアドバイスされた女子学生がいましたが、それは数年後までと考えていいでしょう。男性教員は、夏用・冬用のスーツで充分です。安物でもネクタイは幾つかあるといいでしょう。生徒も保護者も意外と見ています。あの先生ネクタイ一つしか持っていないとか、言われます。女子教員は、リクルートスーツではない、かちつとしたスーツやジャケットを、ぼちぼちそろえましょう。担任を持つようになると、保護者会には少なくともジャケットがいます。卒業式にもそれなりのスーツやドレスがいます。これもまた、口うるさい保護者の目が光っています。でも、新人の初々しい時はリクルートスーツだけでもいいのです。前述のように、着る洋服をあまり気にしなくていいのが教員社会です。外部の人が来る式典や保護者会の時だけ気をつければ、たいていの学校ではそれほどうるさくはないでしょう。ただし、私学には色々ポリシーがあります。女子教員はスカートでなければいけないとか、入試シーズンには特に服装に気をつけなければならないとか、あまりカラフルな格好はできないといった学校もあります。郷に入れば郷に従えです。つまらない気もしますが。

教師論④であう生徒たちの可能性を信じよう

前回の教師論③の最後に、「生徒」を大切に思う気持ちのことを挙げました。当たり前のことなのですが、長いこと学校現場にいと、生徒たちの可能性が見えなくなってしまうことがあります。たとえ心の中でも、始めからこの学校あるいは特定の生徒集団に属しているのは、「生活に問題がある子」とか「できが悪い子」といったレッテルを貼っていると、生徒たちを伸ばしてやろうという意欲がなくなってきます。

それでは、「生活に問題がある子」とはどういった問題があるのでしょうか。窃盗・傷害・恐喝といった犯罪にかかわるような事ならともかく、髪が茶色い、制服の着用が乱れているなどといった類いの規則違反は、注意はもちろんされるべきでしょうが、「生活に問題がある子」というレッテルを永遠に張られる様な事ではないと思います。こういった現象は思春期特有の自己主張の一つであり、風邪の様なもので、時間がたてば解消していく場合もあるのです。その風体から学内外の犯罪的な集団に引き込まれやすいのも事実ですが、「生活に問題がある子」と決めつけられて、在学中ずっと低く評価され続けると、自暴自棄になって本当に「生活に問題がある子」になってしまいがちです。教員が内心でどう思っているかは、生徒は敏感に感じ取ります。

遅刻や無断欠席が多いという場合も、家庭や友人関係に理由が潜んでいることもあります。こういった生活の乱れは、きちんと生徒本人と話し合って自覚してもらわなければ、直るものではありません。まず、本人ときちんと向き合う事が、大切です。長い目で見ながら、本人の成長の可能性を信じる事が大切だと思います。ただし、教員がどんなに努力しても、生徒の生活が崩れていく一方だという場合もあります。それでも、その生徒の一生が学校だけで決まる訳ではないのです。学校から解放される事によって、成長する生徒もいるのです。学校を離れて10年以上後に、やはり勉強したくなって学校に入学し直す大人もいるのです。

それでは「できが悪い子」とは、何を基準にできが悪いとされたのでしょうか。通っている学校でランク付けされたのでしょうか。義務教育の公立中学ならそういった問題は少ないのかもしれませんが、入学試験の成績で輪切りにされがちな高校や私立中高では、その学校に所属していること自体で、できが良い悪いと判断されがちです。首都圏などでは、一部私立中高に入れた生徒を成績が良いとしがちですが、地方では私立高校に行っているというだけで、公立に入れな能力の無い子というレッテルを貼られがちです。そのために、中学浪人までする地域もあると聞きます。たった1回の入学試験では、風邪をひいていて力が出せなかった場合もあるでしょう。それで3年間どころかその後の評価も決まってしまうというのは、どう考えても理不尽です。

加えて、近年は、義務教育の公立中学でも、一斉学力テストの学校別平均点の公表などが行われる事によって、中学校に学力成績のランクが着くようになってしまいました。学校選択制が敷かれている地域では、より顕著なランク付けがされそうです。また、私立高校の中には、近年、特進クラスというのが設定されているところがあります。特進クラスのある高校では、特進クラスに所属する生徒＝できる子、特進以外のクラスに所属する生徒＝出来の悪い子、といった構図になりがちです。こういった生徒個人ではなく、通っている学校やクラスで判断される学力ランクというのは、教師の心のあり様にも少なからず影響します。この学校やクラスでは、生徒にいくら教えても無駄だと教員が思うようになったら、生徒たちの成長も保証されなくなってしまいます。生徒たちには、期待され、成長する権利があるのです。もしあなたたちが、自分の出身大学だけで成長する権利さえ奪われたら、どんな思いがするのでしょうか。少なくとも、教員の資質は、出身大学では決まりません。

それではあらためて、教師にとって「できが悪い子」というのは、何を基準として決められているのでしょうか。学校の中で、教師が感じるできの善し悪しとは、全同級生の中での成績の相対的な位置の事でしょう。狭い学校社会の中での成績の位置が、本当に学力や人間性の評価にあたるのでしょうか？

子どもが小さい就学以前の幼稚園児や保育園児だった時は、親は運動会や発表会を見るとき、自分の子どもしか見ていないことが多いようです。4-6歳のころは、生まれた月齢による成長の差が大きく、同じ学年でも身体も1周り以上異なり言葉の様子も異なります。従って、他の子と比較する必要は、始めからないのです。親は、自分の子の様子を見て、ああ1年間でこんなに大きくなってこんなに成長したと思って、感動するのです。しかし、この思いは、子どもが中高生になるまでは持続しません。いつからか、我が子の成長を見て喜ぶ体質から、同学年の子どもたちの中の順位に一喜一憂するようになるようです。いったい、いつからこのように変化するのでしょうか。

同学年集団中での月齢差は、実は10~12歳頃まで存在します。しかし保護者は、そのころにはもうすでに、集団中での我が子の位置に目を奪われがちになります。生徒自身も10歳頃から、集団中での自分の位置がわかってきます。保護者や本人が、集団中の成績位置にばかり目がいく原因のひとつは、小学校からの5段階成績評価にあるような気がします。現在は絶対評価が取り入れられるようになりましたが、5段階評価は、基本的には集団の中での相対評価です。一方、1年間でどれだけ成長したという伸び率を表す数値は、成績表のどこにもありません。本当は個人にとって必要なのは、そういった評価なのではないでしょうか。私は小学校教員になろうとする学生には、保護者に子どもの成長に注目して欲しいと伝えるように、また、1年間の成長がわかるような作品などの返却の仕方を工夫して欲しい事を、授業で訴えています。

集団の中の成績位置は進路などの参考にはなるでしょうが、自分自身の努力の指針や達成感との直接のつながりが持ちにくいという問題があります。本当は伸び率も表す指標が欲しいのですが、現段階では、教師が工夫して表現するしか方法はありません。「できが悪い子」であっても「成長している子」であれば、教育効果は充分上がっているのです。教員はそこをこのところを理解して、どの生徒に対しても、成長できる機会を保障するような努力をするべきです。それにはまず、目の前にいる生徒たちの可能性を信じる事が大切だと思います。

ヒトという動物は、どんなに歳をとっても、身体の一部が機能しなくなっても、他の部位でカバーしながら、今まで使用しなかった神経系を使用し、部分的に成長を続ける事が可能な生物だと言われています。だからこそ、大けがをしたり、歳をとって動けなくなったりしても、リハビリで一定の回復が可能なのでしょう。このことは、努力次第で成長し続ける人間の奥深さを垣間みる事実です。なんとすばらしい可能性なのでしょう。また、ヒトは社会活動をする生物です。人間社会に属して、あるいは、相互に助け合う、他者に評価される・期待されることがヒトの希望となり、努力するための力を生み出します。あなたたちが向かい合う生徒たちも、あなたたちに期待されなければ、持てる力を充分発揮できなくなる可能性があります。あなたたちが、たとえ心の隅でも、「この程度の学校にしか入れない生徒なら、努力してもたかが知れている」とか「どうせ女の子なんだから、適当にかわいくしていい相手を見つければいい（実際こういう内容のことを言う保護者は沢山います）」とか「長男でどうせ家のあとを継ぐのだから、勉強も課外活動も適当でいい（実際こういう内容のことを言う保護者も沢山います）」と思っていれば、生徒は期待されていない事を敏感に感じ取ります。

教師として教育現場に出ると、思春期の生徒たちとの間には様々な軋轢が生じます。それに保護者の思惑が絡んでくると、それなりに複雑な状態になり、時には放り出したい様な気持ちにもなります。これらの事態に、あまりにも自分の事に様に感じて真剣に取り組み過ぎてしまうと、あなたの心が崩壊してしまいます。前回の教師論③のプリントで述べた理想の教師像の場合と同様に、「ま、いっか」と妥協しながらも、生徒の可能性と成長を信じ続けるということが、実はとても大切な事なのではないかと、私は思っています。

教育実習の誰にも聞けない疑問に答えるコラム

教育実習先への交通手段は？

本学の学生の多くは母校が教育実習先になります。中にはその後家族で引っ越したあと、かなり遠方から通わなければならない事もあります。教育実習校への交通手段は、あなたが在籍していた時とは異なる事もあります。また、一部の中学・高校では、教員にも自転車通学を禁止しています。大体、中学生に自転車通学を禁止している学校で、教育実習生は自転車で通えるというのもおかしいものです。

通学は、基本的には公共交通手段（バスや電車など）に頼る事になります。どのようにして通学したらよいかは、校長など管理職と相談してください。職員である教員とは、立場が違う事を良く理解してください。通学手段というのは、安全性も含めて学校全体の管理に関わるものですから、指導教員が良いとした交通手段でも、管理職が不承知ならば、管理職に従うべきです。どんなに時間がかかってばかりしいと思っても、徒歩で通ったり、遠回りしてもバスで通ったりしてください。

特にバイク・自転車は要注意です。事故が起こりやすいという問題もあると思いますし、生徒が乗る事が可能な乗り物であるにもかかわらず、規則で禁止されていることが多いという問題もあります。

次に、登下校時刻の問題です。朝は30分程度早く登校する方がいいと思います。登校したら決められた出席簿に押印します。帰る時は、規定時間になったら遠慮せずに早く帰ってもかまわないのです。ただし、学校によっては指導教員や管理職にことわってから帰るといったはじめのつけ方が大切です。登下校の仕方も、指導教員や管理職と打ち合わせしておきましょう。現場の教員は結構遅い時間まで働いています。クラブ活動を最後まで見ていると6時7時になります。それから授業の用意をする場合は10時すぎる事もあります。しかし、教育実習生の場合は、専任教員より雑用は少ないはずで、それより、あなたたちが学校で仕事や自分の授業の用意をしていると、厳密に言えばその間指導教員は帰る事ができません。割とそのあたり融通の利く学校もありますが、指導教員の生活のことを思いやれば、あなたたちはたとえ仕事を持ち帰る事になっても、あまり遅くならず早く帰るべきです（持ち帰れる仕事と持ち帰れない仕事があるので要注意）。教育実習の初回に、何時頃まで学校に居てもいいですかと、聞いておくとよいでしょう。かつて、研究授業の用意ができないからといって、指導教員を日曜日まで出勤させた強者がいました。そういう事が無いように、早め早めに仕事が終わるように心がけてください。

教師論⑤教師になるあなたに専門教科があるという意味

★中学・高校教員にとって専門教科はどういう意味があるのでしょうか？

中学・高校の教員は完全な教科専科性です。教科書を作ることができてはじめて教員と認められる世界です。それぞれの教員が自分の専門教科に関する愛情を持っており、専門家としての自負を持っています。もし、あなたが副免許を使用して中学・高校の教師になる時や、教師という仕事に憧れているあまり、一方で専門教科をあまり真剣に学んでなかったりした場合は、これからが勉強だと自覚して、専門家としての力をつけるよう努力を続けてください。大学で教わった事が知識として通用するのは3年程度だと言いますから、専門課程で本免許を取得した人も、卒業してからがスタートであると自覚して、今から勉強するつもりでいてください。

一番問題なのは、専門家としての力は、4年間一所懸命専門教科を学んできた人たちと一緒にできないと最初からあきらめて、僕は「専門教科ではたちうちできないから、生活指導やクラブでがんばろう」という態度です。もちろん生活指導やクラブ指導も重要な教員の仕事です。しかし、教科の専門家として自信がないからという理由で逃げてこれらの仕事をしていると、肩に力が入りすぎて余裕がなくなり、体罰や暴言に頼りがちになります。というのも、中学・高校の思春期の生徒たちは、批判力が高くなる年頃であり、授業を行う教員の力を冷徹に見抜くからです。逆に、多少授業技術が低くても弱々しく頼りなく見えても、生徒にきちんと向き合って自らの専門教科に愛情と情熱を持ち教科内容を生徒に伝えたいという強い意志があれば、一部のやんちゃな生徒に馬鹿にされる事はあっても、その他の生徒には認められる傾向があります。よく生徒から聞く話は、「先生は〇〇の話をする時は本当に楽しそうだね。そんなに楽しいのならば、ちょっとやってみようかな」という声です。

結局、中学・高校の教員がもっとも勝負しなければならない場所は、教室であり授業です。教科が専科である分、他教科の教員から授業内容に口出しされるということはありませんが、専門教科教員どうしの目には厳しいものがあります。何も出身大学の偏差値や出身学科で教員の教科専科としての評価が決まる訳ではありません。卒業したての状況では、大学4年間のカリキュラムや経験が影響し、それぞれにとって若干高いハードルが存在するかもしれませんが、大切なのは教員になってからの生き方なのです。色々な学会や研究会などに積極的に参加し、勉強や教材研究あるいは教科に関する専門の研究を続けることです。また、実際に生徒に向き合って、よりその生徒集団にあった授業ができるような工夫を続けることでしょう。

★教師が生徒に伝えるのは、専門教科に関する理論と感性です

大学4年間で得た専門教科に関する知識や感覚はすぐ古くなります。書道などの芸術系教科や保健体育などの技術を伴う教科では、1年間触ってなければ、身体はどんどん感覚を失います。使ってなければ、英語は話せなくなるし、数学は問題がとけなくなったりします。国語も新しい文学が登場したり、新しい解釈が生まれてきます。もともと変化が激しい教科は理科・社会で、10年もたてば教科書の内容は古くなって使えなくなります。つまり、大学で教わっただけで放っておけば、知識も感覚もすぐ使えなくなるということです。これは、教員免許は、持っているだけではすぐ使い物にならなくなるという事を意味しています。あなたが教員として教壇に立ちたいのならば、大学を卒業した後こそ、自分の専門教科についての勉強や研究を続けなければならないという理由がお分かりでしょうか。あなたたちが大学で教わった事は、その後独り立ちした時、自立して勉強するための方法論なのだと思います。

また、教師が授業で生徒に伝える内容は、教科書に載っている知識だけではありません。知識だけならば、コンピューターがあれば充分です。むしろ、それぞれの生徒集団の特性や反応を見ながら、生徒に合った教科内容や教科に関する感覚を伝える事、その教科の考え方を学ばせる事が、教師の仕事なのではないかと思います。教科内容が、知識だけでなく感覚や考え方（理論）なのだとなれば、やはり教師の能力は、教科内容に日常触れていなければ、どんどん後退していくと思われま

★中学と高校の教科指導はどうちがうのか？

中学と高校の教員免許取得のために必要な大学の授業内容には、それほど差はありません。必要な教科に関する科目の単位数も同じ20単位ですし、教職に関する科目もあまり変わりません。確かに、生活指導や学級運営については、年齢による差があります。もちろん考察力や知識量には、両者に差があります。あとは義務教育という縛りがあるかないかです。義務教育のためか中学の教員免許の方が、必要な単位数が多いようです。介護等体験もありますし、教育実習も3週間です。道徳教育の研究も必要です。しかし、教科に関する科目の最低単位は、現在は同じ単位数（20単位）となっています。但し、15年程度前までは、高校教員の免許をとるには、教科に関する科目は40単位必要でした。現在でも国公立大学では、中学教員免許でも40単位必修と言われているようです。つまり、専門の教科に関する科目が20単位では、中学、まして高校の教員になるには足りないという事なのです。

それでは、中学と高校の教員の教科教育に関する違いは、知識や理論の深さ、専門性の高さだけなのでしょうか？実は、あなたがどの教科に属するかによって、この実情は異なります。

あなたの専門教科が音楽などの芸術科、英語科・国語科・数学科・技術家庭科・保

健体育科だったりする場合、中学でも高校でも教科にそれほど極端な違いはありません。同じ教員が双方を教える場合、教員自身にもそれほど違和感はありません。芸術科と技術家庭科の場合は、実は中学から科目ごとに教える教員が異なります。他の教科と異なって芸術科は科目ごとに教員免許が異なります。中学から美術・音楽・書道という科目ごとの教員免許になっています。同じ芸術科の教員でも、書道の教員が美術を教えるということはありません。技術家庭科も同様に一つの教科であるのに、技術科と家庭科の教員の免許が分かれており、技術を教える教員と家庭科を教える教員は中学から異なります。

以上の教科に対して、社会科（高校では公民科と地歴科）と理科は様相が全く異なります。つまり、中学と高校双方を教えるのには、教員にも勇気がいると言う事なのです。よく小学校の算数と中高の数学は全く異なるものであり、小中の間にギャップがあると言われるのですが、社会科と理科の場合、そのギャップは中高の間にあるように思われます。それほどこの2教科では、中学から高校になると、専門性がぐっと上昇するのです。例えば同じ地歴科の教員免許を持っているにも関わらず、世界史が専門の高校教員が高校の日本史や地理を教える事はほとんどないと言って良いでしょう。それでも中学では、社会科という一つの教科なので、世界史が専門でも自然地理でも公民（でも教えなくてはなりません。理科も同様です。中学では、社会科教員も理科教員も、専門外の科目を教える事になるので相当な努力が必要です。社会科のフィールドワークと理科の実験授業は、事実上その分野（科目）の専門教員でなければ指導しにくいので、社会科理科の高校教員は、全科目を教えなければならない中学教員を非常にいやがるのです。

教育実習の誰にも聞けない疑問に答えるコラム

職員室ではどういう風にすればいい？個人と公人を使い分けよう

あなたが初めて教育実習の挨拶に実習校へ行く時、伺う場所は、校長室か職員室、あるいは教科研究室でしょうか。たとえ慣れ親しんだ母校であれ、初めて教育実習生として訪問する場合は、きちんとした態度で礼を尽くしましょう。前もって先方の都合に合わせてアポイントメントをとる事はもちろんですが、必ず予定の5分前には到着し、受付に声をかけ、上履きに履き替えて入校します。校長室や職員室に入る前には、コートを着る季節ならコートは脱いで手に持ち、暑くてスーツの上着を脱いでいたのなら、上着を着直します。ノックをして返事があれば扉をあけ、入る前に一度礼をし「〇年卒業生の大東文化大学の〇〇です」と告げます。礼（お辞儀）をする時は、頭をぺこんと下げるのではなく、腰を45度ほど折って挨拶すると礼儀正しく見えます。いすには、「どうぞ」と言われてから座るようにしましょう。お茶を出されたら飲

んでもかまいませんが、必要な事項のみ相談するようにします。不要な長居は禁物です。帰る時には「お忙しいところお時間をいただき本当にありがとうございました。実習の時にはよろしくご指導のほどお願いいたします」などと礼を述べて「失礼します」と断り、ドアの外へ出て、来た時と同じように礼をしてからドアを閉めます。

教育実習中は、学校内で机か作業机は使わせてもらえらると思います。どちらにしろ、教育実習生の控える場所は指定されるはずですが、ただし教育実習生が多い中高では、机も共有の場合があります。職員室内かもしれませんし、教科研究室かもしれません。会議室が臨時に教育実習生の控え室になることもあります。こういった場所は、どこも公的な共有の部屋ですから、私的な使用はさげましょう。

それでは公的な仕事と私的な仕事とはどういうことをいうのでしょうか。教育実習に関する授業の用意や実習ノートの作成、担任業務やクラブ活動、教材研究などは、公的な仕事と考えて差し支えありません。これらに関する印刷も電話も、学校のものを使用してもかまいません。ただし一応許可は得ましょう。学校によっては、教育実習生の印刷には別の印刷機を当てるというところもあります。家族や友人への連絡に学校の電話を使用してはいけません。緊急な場合をのぞいて、家族や友人へは勤務時間外に自分の携帯を使用して連絡するようにします。メールも学校のメールでは、私信は出さないというのが原則です。いつ見られても文句は言えません。それが嫌な場合は、自分で学外のメールアドレスを取得します。暇な時があっても、学校のコンピューターでゲームをしてはいけませんし、まして勤務時間中にスマホでゲームをしたり、テレビやドラマを見たりしていてもいけません。教材研究以外の雑誌や漫画本を読むのもよくありません。勤務時間中に音楽を聴くのもよくありません。

実習生控室の使い方にも注意しましょう。あなたの部屋にしないようにしてください。職員室の机を使用しているのならなおさらです。ご飯を食べたらすぐ片付ける。私物はおかない。机のスペースを占有しないなど、注意を払ってください。ゴミも毎日片付けましょう。掃除もしましょう。もし、部屋にお茶やコーヒーがある場合でも、教員が費用を出しあって飲んでいる場合もあるので、勝手に飲むのはやめましょう。視聴覚室やコンピューター室など共有の教室を使用したあとは、すぐ他の教員が使用する事を考慮して、使用した物をもとの場所にもどし、私物は片付け、現状復元したあと鍵を閉めて退室しましょう。

教師論⑥ 正確な知識を伝える授業と生徒自らに 考えさせる授業

★あなたたちは 21 世紀を生きる生徒たちに何を学ばせればよいのでしょうか？

「生きる力」を養うといった、何が何だかわからない様な標語が学習指導要領に登場して久しくなります。この「生きる力」とはどんな力なのでしょう。最近では PISA 的な学力を養い「生きる力」を伸ばす、などとも言われています。人によっていろいろな解釈がなりたちますが、「生きる力」とは、生きるために自ら考えて総合的に判断し方針をたて実行できる力、とでも言えば良いのでしょうか。社会的に行動できる力やコミュニケーション能力を含んだ総合的な能力という解釈もあります。要するに総合的な判断力を養う力とでも言ったら良いのでしょうか。それでは PISA 的な学力というのはどういう学力のことをいうのでしょうか。PISA とは OECD が 3 年おきにおこなっている 21 世紀型の学力を測ると銘打った国際学力試験の事で、2006 年の試験結果は日本の学力低下を明確にしたと言われ、通称「PISA ショック」と呼ばれています。これを機会にいわゆる「ゆとり教育」が見直され、理数科と国語中心に大幅に授業時間数が増加されることとなりました。同時に、日本の子どもたちの表現力・読解力の低下が問題になり、すべての教科に「表現する」という学習目標が入る事となりました。

この OECD の PISA による 21 世紀型の学力とは、どういった学力をイメージしているのでしょうか。私のもつイメージからいうと、この新学力は、知識を身につけるだけではなく、持てる知識を総合的に組み合わせ構築し現実の複雑な社会現象や自然現象を解明する学力、その上で他者と議論することができる力、さらにそれぞれの現象にふさわしい行動方針を出せる能力、といった内容であると思います。つまり、PISA 的能力とは、従来日本で「学力」とされがちであった「記憶した知識量」や「きまった公式に当てはめて、定式的な問題を解く能力」ではなく、得た知識を使って考え、応用する能力といってよいでしょう。さらに付け加えるとすれば、グローバル化に対応できる能力、情報社会・知識基盤社会に対応できる能力といったところでしょうか。いわゆる「ゆとり教育」時代もこのような能力は重視されていたのですが、こういった力の養成には、基礎的知識の定着と、知識を総合的に組み直して運用する演習が必要であるということが軽視されていたようです。そこで、現在の学習指導要領は、授業時間数を増加させると同時に、すべての教科について、教科内容の総合化、現実の複雑な事象の解明、知識の運用（応用）が重視されるようになりました。さらに新学習指導要領（2016 年 12 月答申）では、いわゆるアクティブラーニング「主体的・対

話的で深い学び」方を導入することによって、自ら学び続ける子どもたちを育てようという方向が示されています。

以上のことから考えられる現学習指導要領の「生きる力」を養成する学力というのは、次の様な能力であるという事が予想できます。

- (1) 基礎的なものの考え方と知識、および、現代的な知識を学び、頭の中で分類・整理する能力。
- (2) 多くの情報の中から本質的なものを選びとり、取捨選択できる能力。
- (3) 多くの知識や情報の中から、必要なものを選択し、それぞれを関連づけて総合的に考察し、運用できる能力。
- (4) 分析した内容から考察し、行動するための指針を示し、実行できる能力。
- (5) 文化や言葉・習慣・年齢を異にする人たちと、様々な表現手段を用いてコミュニケーションを測る能力。

つまり、あなた方が授業を通じて指導し生徒に獲得してもらいたい学力というのは、これらをめざす様な力だと言う事なのです。しかし前述のように、教科書を確実に記憶するといった教育方法では、これらの力は養えません。また、教員になるあなた方自身が、高校までの学校教育で、こういった力を十分養ってきているかといえば、必ずしもそうとは言いきれません。そこで、大学の授業ではこの点を少しでも克服してもらいたいと考えているのです。具体的に言えば、①レポートなどを作成する時に1種類のHPや著書から写すのではなく、多くの情報から選択し、自ら考えて作成する、②演習・教師論などの授業で、発表能力を養い積極的に発言し議論する、③他者の発表を評価し、そのことを表現する、④サークル、ゼミ活動、教育実習、ボランティア、インターシップ、アルバイトなど様々な経験をする中で、常に学ぶ努力をし自らの持てる知識を意識して運用する、などです。また、必修であるなしに関わらず、卒業論文を書いたり、懸賞論文を書いたりといった経験も、あなたたちの考える力を向上させるでしょう。特に専門教科に置けるこういった考える力・知識を実践にうつす力・議論する力の養成が、教員になるためには不可欠だということが、おわかりになったでしょうか？

★正確な知識を伝える授業と、生徒に自ら考えさせる授業と、両方が必要

以上の様な力を養うためには、現場の教師はどのような授業を行えばよいのでしょうか？

皆さんは正確な知識を伝えるのが授業だと思っていませんか？けれども、考える力や表現力を伸ばす演習なしで、「生きる力」の様な力が養えるとは思えません。実は、

いわゆる「ゆとり教育」の時代でもこういった「生きる力」や「自ら考え自ら学ぶ」学習習慣といった内容は、学習指導要領にあがっていました。しかし、授業数が少なくなった現場では、知識の伝達がせいっぱいで、知識を運用する作業をおこなう時間が足りなかったのです。また、ゆとりを生むために無理に知識量を制限したため、知識基盤の構築がいびつになり、考察や議論・実習実験に必要とされるだけの知識が足りないという現象がおきました。

それでは、授業時間数が増加した現在の学習指導要領では、この問題は解決したのでしょうか？実は、そうでもありません。というのは、授業時間数の増加に伴って授業内容も大幅に増加したので、知識量の不足は改善したものの、考察・議論・実習実験に必要な時間が充分確保できるかという点、今までどおりの教え方では、おそらく時間の確保ができない可能性があると言う事なのです。確かに教科書内容では、考察・議論・実習実験に割かれているページ数が大幅に増加しましたが、はたして教員が授業にこれらを取り上げるかどうかは、不明確なのです。このことは中高の教員になるあなたたちは、きちんと自覚していなければなりません。

PISA 的学力というのは、もともと欧米諸国で生まれてきた考えです。フィンランドに代表される様な多くの欧米諸国の学校教育では、予習・復習に必要な時間が多くとられ（宿題・課題が多い）、授業ではそれらの知識を運用した考察・議論・実習実験に多くの時間が割かれています。しかし日本では、相変わらず知識の定着のみに時間がかけられる傾向があります。一方、実社会では情報化グローバル化が進み、必要とされる人材の性質が変化してきています。確かに、高度経済成長期には、一定の知識を身につけた技術者・職人・事務員といった人材が沢山必要だったのでしょうが、現在は少々異なります。単に知識があつてマニュアル通りに動けるというだけでは、アルバイトや派遣社員にしかねないという傾向になってきています。正社員として必要とされる人材は、持てる知識や情報を選択して運用し、新しいアイデアを出しマネジメントを行う戦略的な働き方ができる人材です。PISA 的学力という考え方は、こういった人材が多く必要となった社会の変化にあわせて登場してきたのです。

一方、前述のように、知識の定着（というよりか知識の伝達）だけでせいっぱいの学校では、知識の運用を重視する習慣が根付いていません。いわゆる「ゆとり教育」は、それまで確保されていた実習実験の習慣まで学校から奪ってしまいました。そこで台頭してきたのが、塾による「実験実習」講座です。もともとこういった塾は、総合能力を育成し、考察能力を養成することに力を入れてきました。こうなると、今のままでは、PISA 的学力が育成される生徒は、精神年齢が高く自ら考察する習慣がある生徒、家庭の意識が高く家庭で考察能力の育成ができる生徒、および、塾で考察能力を上げる授業や、実験実習講座を受けている生徒ということになり、これらにあてはまらない生徒は、PISA 的学力が定着せず、結果的には、社会に必要とされる学力に格

差がうまれることになりかねません。また、この格差は、そのまま就職格差になりかねません。中高教員は、これらの事実を重く受け止めて、日常の授業で意識的に考察・議論・実習実験をおこなう機会・生徒に自ら考えさせる機会を作るべきであると、私は考えています。どうでしょうか？

それでは、はたして実際の教育現場で限られた授業時間内で、正確な知識を伝える授業と、生徒に自ら考えさせる授業の両立が可能なのでしょうか？実際問題として、高校なら可能でしょうが、義務教育である公立の中学では考えさせる授業に多くの時間を割くのはかなり難しいかもしれません。また、学校によって相当差もあるでしょう。PISA型学習が中心である欧米諸国の学校では、実は教科書の知識のひとつひとつについて細かくは教えていないのです。また、日本の様に教育内容の知識量を厳密に決めている国は、実はそれほど多くありません。日本の教科書検定は、極めて厳密であり、義務教育の教科書は同学年の同教科なら出版会社が異なっても、価格ページ数までほぼ同じです。従って中学では、教科書にある知識の定着に重点がおかれがちなのです。その背景には、同地方自治体内の中学では、義務教育ならば教科書も同じであり、公立高校入試問題も同じ教科書で学んでいる事を前提とした統一テストになっているということがあります。そういった縛りが無い私立中高一貫校では、中学でもすべての知識の定着に神経質にならないでもすみ、考えるための授業を挿入することもできます。もうひとつには保護者の意識の問題もあります。保護者が学校教育を受けた時代は知識教育が中心でした。教科書内容は全部逐一授業で知識の伝達をするべきだと考えている方もいるようです。

私は、以上の様な公立中学の事情があっても、知識の定着にすべての授業時間を使用しないで、考えたり議論したり、あるいは、実習実験をとり入れる時間を、授業内に組み込んで欲しいと思っています。知識の定着が時間的に困難なようなら、ワークシートを作って宿題にしたり、一部の内容を家庭学習課題にしても、考える作業の時間をとって欲しいのです。そのため、教科書のすべてが終わらない場合は、その理由をきちんと保護者に連絡し理解してもらい、説明責任の努力をほらうべきです。こういう時にこそ、学習指導要領を天下の宝刀のように持ち出し「文科省もそういった方針である事」を強調し、「考える力が育成されないと受験にも不利であること」「知識は、すべて教えてもらうより、自ら調べて学ぶ事によってより定着すること」などを丁寧に説明するとよいでしょう。

教育実習の誰にも聞けない疑問に答えるコラム

オレの言葉遣い、文章、変っすか？

表記の様な言葉遣いは、教育実習では使ってはいけません。「マジすか？」などとすぐ出てきそうですが、日常言葉にでないような注意をしましょう。文章にもつつい口語が登場します。「〇〇のようなヤツが」などという口語は文章で使用してはいけません。教員や保護者宛のメールに、絵文字がでてくるなど問題外です。自分のことは「私」「僕」と言います。自分のことを「自分」と呼ぶのもやめましょう。今から訓練する事をお勧めします。

生徒に対してなら、よりフレンドリーになるから表記の様な言葉遣いでもいいと思っている人へ。それは大いなる勘違いです。生徒にこそ、丁寧な言葉遣いをするべきです。決して乱暴な言葉遣いはしないこと。服装にも同じ事が言えますが、言葉遣いは、その場のあり方を規定します。生徒には、授業は少々緊張して受けてもらいたいですし、卒業式は学校への感謝の気持ちを持って参加してもらいたいものです。いつも休み時間はラフな教員が授業になると緊張気味の様子を見せる事によって、生徒たちにも自分たちの過ごし方を教える事になります。

生徒に対する普段の言葉は、単語ではなく、文章で話しましょう。教師が主語・述語、助詞・助動詞などをきちんと使用する習慣が、生徒たちにとってもきちんと文章を扱う練習になるのです。実習ノートの書き方も、文書として完成させることを心がけてください。最近、段落の始めは一字下げ無い人、段落の終わりに改行するのではなく、文章（sentence）毎に改行する人など、オーソドックスな文章の書き方を逸脱するケースが目立ちます。実習ノートでは、そのような書き方はさげましょう。

きちんとした言葉遣いというのがどういうものか、どうしてもわからないという方は、NHK のニュース番組のアナウンサーの言葉遣いをまねてください。自信が無い人は、教育実習に行く前に、ぜひ練習してください。もちろん、就職活動の役にもたちます。

教師論⑦即効性のある学びと、10年後の成長のための学び

★中高では、あなたの授業や生徒に対する評価は、いつも他の教員と比較されている。

大規模でクラス数の多い中学・高校では、同学年の同じ教科を数人の教員で担当し合うので、必然的にそれらの教員は比較されがちです。どの教員がどのクラスを持つかという発表がある4月には、「あたり」「はずれ」の声が飛び交います。幼稚園や小学校教員の場合は、担任発表の時そういった声が飛び交うのですが、中学・高校では担任発表では小学校ほど大騒ぎされません。近年の中学・高校では、進路に推薦入試を選択する生徒が多く、成績の多少の変動が自分の一生を決めるとあって、成績評価や成績分布、教員による評価の違いには、生徒本人も保護者も極めて敏感です。

前にも述べたように、成績評価は絶対評価に移りつつありますが、やはり、相対評価がかなり加味されています。体育・図工などの実技教科は、厳密に相対評価にはしない傾向がありますが、主要5教科（国語・数学・英語・理科・社会）で必修に近い科目では、相変わらず相対評価が幅を利かせています。ただし、赤点である1に関しては、平均点の半分以下に限るなどの一定の基準が、学校内の教科ごとに定められています。もし、あなたが始めに赴任した学校が、大規模校で同じ教科の複数の教員が同学年を担当している場合は、その学校の年間指導計画の打ち合わせと定期試験システムを始めから聞いておきましょう。もし、統一テストなら、遅くないうちにあなたにも作問の順番が回ってきます。試験内容というのは、あなたが思っている以上に、教員の教科に関する考え方が出るものですから、おそらく他の教員は、新人のあなたがどのような考えで授業をしているかを知りたくて、興味津々のはずです。

定期試験の作問・採点のような場面にであった時に、あなたが最初に突きつけられる問題が、あなたが生徒に対して求める学力が「即効性のある学び」か「10年後の成長のための学び」か、ということです。この課題は、前回の教師論⑥の「正確な知識を伝える授業」か「生徒に考えさせる授業」か、という問題とどこか似ています。つまり、両者とも大切なのですが、どちらかというところ、前者で満足してしまいがちであるという意味で良く似ているのです。後者の方が、本当は大切なのではないかと思える点も、良く似ています。

前にも述べましたように、担当クラスの平均点が良いと、生徒からも保護者からも評判の良い先生になります。教員も若いうちは、生徒や保護者の評判に一喜一憂しがちです。もっとも、他者の評価を全く聞かないのも困ったものなので、多少気にした方が良いとは思いますが。

統一テストでは、個人の特徴のある教え方を中心とした作問はできません。ついつい、一般的な平凡な問題、例えば、教科書の章末問題に似た様な問題になりがちです。そんな統一問題の定期試験で、自分のクラスの平均点を上げようと思えば、授業は最低限の知識だけ急いで教え、あとは章末問題に似通った問題を覚えなさいとばかり繰り返せば、確実に教えたクラスの平均点はあがるのです。

★「即効性のある学び」と「10年後の成長のための学び」

私も教員になって1-2年目の時に、試しに、実験・実習の時間をいっさいあきらめて、その分、同じ様な問題演習を繰り返してみました。そうすると教えたクラスの平均点は確実にあがるのです。これが「即効性のある学び」です。でも、その時、「これはまずいぞ。私はなんとというひどい授業をしているのか！！」と思ったのです。考える作業を取り入れることをしないで、受験勉強ばかりやっている授業もこれと同じ効果があります。保護者や生徒のその時の受けはいいのですが、果たして、こういったタイプの授業ばかり繰り返していて、生徒たちの学力は本当に上がるのでしょうか？ 第一、私たち教員が目指すのは、定期試験や入試の時に一時的に成績を上げるのが目的ではありません。考える力、伝える力、議論する力を養い、社会人になった時、つまり10年後に成長するような力をつけてあげるのが本当なのではないのでしょうか。つまりこれが「10年後の成長のための学び」です。私はさんざんなやんだあげく、多少クラスの平均点が落ちても、「即効性のある学び」と「10年後の成長のための学び」を3：7程度授業に取り入れるようにしています。ただし、生徒・学生集団を観察して、その集団の力や意欲にあわせて、この割合は変化させるようにしています。

「即効性のある学び」は別名「見える学力」とも言われています。一方「10年後の成長のための学び」は「見えない学力」とも言われています。後者の学力は、教えるのに手間がかかる割には効果が見えないので、新人教員の頃は、なかなかこちらに舵を切る事ができません。しかし、私は根気よく、生徒たちに（学生たちに）、学ぶ理由を説明しながら、続ける事にしています。私立中高の場合は、どちらの学力をより多く目指すかという方針を、学校が明確に持っている場合があります。受験勉強の演習に多大な力をそそいでいる学校は、前者の学力により大きなウェイトを置く事になるでしょうし、自学自習をうたい文句にし、実験・実習に力をさき、教科書は配るだけで、まったく独自の授業をするような私学は、後者の方に力を注いでいることになります。どちらの学校の場合も、若い教員が一人だけ自分の考えを強調しても、なかなかうまくはいかないでしょう。しかし、教員という仕事のすばらしさは、こと授業に関しては、運営権は基本的に担当教員にあるということです。あなたは、自分の力と考えに基づき、双方の学力育成にどれほど力をさくかを、試行錯誤をしながら、自分で決めていく事ができるのです。

以上、私は良く学校現場で繰り返されている評価の問題について述べてきました。しかし、学生のあなた方は教育実習に行く時、新学習指導要領の「3つの観点」の評価法の問題にぶつかるでしょう。これは前述のアクティブラーニング（「主体的・対話的で深い学び」）の導入によって生まれた評価の観点です。それは、「知識・技能」「思考・判断・表現」の2観点に加えて、「主体的に学習に取り組む態度」が加わった3つの評価の観点であり、これが教育実習生にも求められるということなのです。この3つめの評価をどうするか、それを教科の成績にどう反映するかは、これからの現場の課題であると思います。

教育実習の誰にも聞けない疑問に答えるコラム

指導教員と校長先生の意見が違う時にはどうしよう

教育実習で指導教員と校長・教頭先生の意見が食い違うということは、意外に多いのです。教育実習生は、これにおろおろする事になります。特に、公立中学では、校長先生の力が強いので、無視してしまうと、指導教員の先生にも迷惑をかける事になります。結論から言えば、校長先生の意見を優先してください。もちろん、指導教員にもその旨を伝えます。指導教員はむっとすることもあるでしょうが、「ま、仕方ないね」と言われたら、校長先生の方針を守ってください。もし「そんなの無視しろ」というような指導教員ならば、「それなら先生が校長先生に交渉してください」と言ってみてください。それで交渉してくださるようならば、その指導教官の方針に沿えばいいことです。教科指導方針でこのような事はほぼ無いのですが、通勤手段をどうするかと言った単純なことで、良く起こりがちです。

教師論⑧教科書の指導書（教師のマニュアル） を活用しよう

新人教師や教育実習の時、教えるべき教科が自分の得意分野で、「こう教えたい」という強い気持ちがある場合は、授業内容もすらすら計画できるでしょう。あなたの目はキラキラとし、授業時間目一杯熱弁をふるい、生徒にも「先生楽しそうだね」と思わせ、授業内容も充実しています。

では、不得意分野を教えなければならない時、あなたはどうしますか？あなたのその分野の知識の引き出しの中はスカスカ、計画もなかなかできない。他の教員が8時間かけて教えるところが、教科書を見せるだけで2時間で終わってしまう…。実は私にも経験があります。これでは、授業をうけている生徒の方も、きっと面白くないでしょうね。こういう時、あなただったらどうしますか？中には、苦手分野は「教科書を読んでおけ」といって飛ばしてしまう教師もいます。でも少し立ち止まって考えてください。それでは、学習指導要領とは何のためにあるのでしょうか？

あなたが中学生高校生に本当に必要な学力と考えている事と、学習指導要領が求めていることとずれている事もあるでしょう。しかし、特に義務教育（中学）の学習指導要領の場合は、その時の時代背景に照らして作られているすべての国民が身につけて欲しいと思われる基本的な指針です。もちろん、完璧な指針などはありません。ですから、生徒の現状を見ながら、学習指導要領や教科書の足りないと思われる部分は補うべきです。教える内容に濃淡ができるのも仕方ない事です。しかし、始めから苦手分野は教授内容からのぞいてしまうという事と、授業内容に濃淡ができるという事は、全く異なる事です。あなたに教える自由があるのと同時に、生徒たちには義務教育内容を教わる権利があるのです。ただしこの権利は、教科書通りに教わる権利ではありません。何回も述べているように、教科書を逐一隅々まで教える必要はありません。学習指導要領の内容を自習できる様な力を生徒につける、あるいは、残りは自分で充分自習できるような道筋を示してやれば良いのです。

そこで、あなたにとって苦手分野を教えるとき、あるいは、得意であっても言いたい事が沢山ありすぎて散漫な授業になりそうで、授業展開の方法に悩んでいる時などは、ぜひ、教師のマニュアル＝指導書を紐解いてみてください。指導書は、教科書会社が教科書にそって作成しており、教員が、授業をするための知識の引き出しを沢山作れるように、作られています。ページ数も教科書よりはるかに多く、例えば、中学校の教科書の指導書には、高校以上レベルの内容まで書いてあります。また、教科書の利用の仕方、単元の目標や標準的な必要授業時間数、授業計画の立て方などが詳細

に書かれています。つまり、指導書は、足りないあなたの知識の引き出しを満たすためにあり、授業になれないあなたが授業計画を立てるためのお手伝いの為にある書籍なのです。従って、指導書の内容をすべて教えようとする破綻します。多めと思う部分は、自分の知識の引き出しに整理してしまいこみましょう。

指導書が上記の目的で作られている以上、あなたが学習指導案を作ろうとする時、もっとも役にたつのが、おそらく指導書でしょう。困った時の指導書だのみという訳です。教育実習生の時は、よく利用してください。値段は少々高いのですが、利用価値は十分あります。ただし、あなたはティーチングマシンではないので、いつまでも指導書にたより、指導書通りに教えるという姿勢はどうかと思います。たとえあなたの授業が指導書から始まっても、あなたの目の前の生徒の状況を見ながら、内容は変えられていくべきです。それでこそ、あなたは専門能力を持つ教師なのです。

教育実習の誰にも聞けない疑問に答えるコラム

忙しいのに、雑用をいいつけられた

教育実習で学ぶのは、授業方法、生徒指導方法、担任業務、学内業務分署などについてです。ついつい授業方法だけと思いがちですが、実は中高の教員にとって授業に関わる仕事は、すべての教員の仕事の1/3くらいの割合にしかありません。クラブ活動が忙しい教員ですと、授業の割合が1/5程度にしかならない教員もいます。そこで、教育実習担当指導教員は、生徒のプライバシーに関する仕事以外を、できるだけ教育実習生に体験させようとするのです。掃除の監督、クラブや委員会の指導などは、雑用とは思わないでしょうが、生徒から回収したレポートや書類を番号順にならべる、学籍番号などを書類に記入する、出席簿の集計、保護者会の名札作りなど、雑用をいいつけられたと考えがちです。それらは雑用と思われるかもしれませんが、教師になってすぐ取りかからなければならない大切な仕事なのです。学校によっては、担任が自分の教科以外のすべての授業の宿題の提出状況を毎日チェックし、その都度連絡帳に書き込む仕事をしている場合もあります。そんな学校では、どんなに忙しくても、終礼直前までに提出物のチェックを終わらせておかなければなりません。あなたは、初めての授業や指導案作りで、悲鳴を上げそうに忙しい状況でしょう。そんなこんなで、忙しくなると「こんな雑用をおしつけて」と、指導教員のせいにしたくなります。しかし、それも大切な教員の仕事なのです。

「雑用をいいつけられた」ではなく、「色々な仕事を体験させていただいている」とうスタンスで、色々なことを覚えてください。

教師論⑨教師は万能ではない。生徒は自分の思うようにはならない

真面目で、いつも一生懸命、そういった人ほど完璧をめざそうとします。あなたもそうではありませんか？

「教師は聖職者」であり「こうあるべきだ」と強く思っていないですか？ どんなに生徒たちにいたずらをされても「いつも冷静である」あるいは、いつも生徒の事を思う「熱血先生でありたい」と思っていないですか？ 授業で、どんな質問にも正しく答えられる信頼される教員、「いじめ」問題にも真正面から取り組んで解決し、24時間教師生活をし……と思っていないですか？ そんな教員はいません。教師は万能ではないのです。普通の人なのです。理論にもとづいて対処しても、理論通りの結果がかならずしも得られません。

★他の教員が完璧に見える

現場で多くの教員を見ていると、完璧に教師業を行っているように見えることがあります。もともと「人好き」のする性格で人気があり、苦もなく人付き合いができるタイプの人が居ます。そんなところで張り合っても何にもなりません。誠実に教師の仕事を行えば、評価は自然とついてきます。

★熱血先生がいいわけではない

熱血先生になりたいと思っていないですか？ ドラマの中の熱血先生は、最終的に生徒に指示され、多くの生徒が泣きながらついてきます。確かに、生徒の中には、強くひっぱって指導してもらおうと安心する生徒も居ます。しかし、思春期の自己が確立する時期の生徒が、いつまでもまっすぐにひたすら教師についていくようでは困るのです。教師が無理に自分の考えを押し付けようとする、生徒は引いてしまいます。教師があまりにも熱血であると、何を言っても教師に理解してもらえないと苦悩する生徒も現れ始めます。

世の中で一番ひどい言葉のひとつが「俺についてこい」や「私の言う通りにしなさい。悪いようにはしないから。」であると、私は考えています。なんと無責任な言葉でしょう。教師として、あなたは本当にその人の人生に責任が持てるのでしょうか？ そんな人はいないはずですが、この言葉は、生徒の自主性や自ら考えて判断することを否定し、すなわち人間性を否定する言葉であると思っています。思春期の子どもたちは、安心しておとなに付いていく時期を過ぎ、不器用ながら自立する練習をしているので

す。かれらの内なる成長する力を信じて、どうやって生きていこうか、どういう判断しようかという時に、支援してあげるのがあなたの仕事なのです。ただし、思春期の子どもたちは、友人関係をすべての価値判断の上に置きがちです。犯罪に手を貸しそうなとき、人道的に問題がある時には、他の教員の手も借りて、断固として対処すべきです。早期発見、早期対処というのも大切なポイントなのです。

★ 教師には無駄な時間・教師以外の生活が必要である

教師生活は時間通りに終わりません。残業手当もありません。いつも見られているという意識も必要です。若い時は、ついつい 24 時間教師生活になりがちです。これでは、あまりにも狭い箱の中の思考になりがちで、余裕も無くなり、生徒にも一面的にあたり、追いつめてしまいそうです。まず、直前の仕事に関係ない研究や勉強もしてください。趣味も大切にしてください。そして何よりも恋をしてください。家庭も大切にしてください。忙しいですね！！

要するに、心の余裕や知識の余裕が、教師には必要なのです。教師になって 2-3 年後には、その時間を作るために、ちょっとした段取りの工夫や、手を抜けるところを見つける事を覚えてください。一番大切なのは、完璧を目指さない事です（いい加減でいいという意味では、ありません）。教育には理想が必要です。ただし、理想通りにいかないのも、また、教育なのです。

教育実習の誰にも聞けない疑問に答えるコラム

「あいさつ」「伝達（報告）」がないと怒られた

教育実習生は、まだ学生なのです。いるはずの学生がどこかに行ってしまったら、指導教員や管理職が責任を問われるのです。自分が居る事をアナウンスするのがあいさつです。学校はざわざわしていますから、ぺこんと頭を下げるだけでは、挨拶をしていると思われません。大きな声ではっきりと相手の目を見て挨拶しましょう（静寂が必要な場所は別）。

同じように、必要に応じて帰る事、出かける事、クラブ指導をすることなどを、他者にわかるように伝達することが重要です。そうでないと「あいつどこに行った？」になってしまいます。指導教員に伝えたから良いとは思わないでください（学校にもよりますが）。相手にメモを残す事をお勧めします。職員室の机に今居る場所を掲示することも効果的です。

何か仕事を依頼された時には期限を確認し、指導案を見ていただく時にはアポイントメントをとりましょう。いつもノートに記録する事を忘れずに。また、忙しい指導教員は忘れがちですから、「お約束通り、明日 15 時から指導案を見てください」といったメモを指導教員の机の上に置くといいですね。もちろんその時間までに、指導案は完成して見てもらうのは原則です。

教育実習の挨拶に行った時に、大学の指導教員が教育実習中に挨拶にくる、あるいは、研究授業にくる必要があるかどうか、聞いておいてください。高校などでは、研究授業をしない学校もあります。もし、学校の方針が大学の教員も研究授業にくるべきだという考えならば、早めに大学の教員に伝え、実習校と大学の教員の間時間の調整などを行います。大学の教員は日曜といえども、学会や研究で遠くに出張する事もありますから、研究授業の開始時間の変更があった場合は、すぐ連絡しましょう。私も以前日曜に名古屋で学会に出席中の夜、月曜の千葉の遠隔地での実習が午後から 1 限目に変更したとの電話連絡を受け、泊まる予定のホテルをキャンセルし、最終新幹線に乗るべくタクシーで名古屋駅に急行した事があります。こんな事が無いように！！

教師論⑩一人で解決しようと悩まない。他の教員に相談しよう。

教師は、現場に出るとすぐ一人前あつかいされます。企業のように、しっかりとした指導はほとんど期待できません。新米だからできないのは当然なのですが、学級運営などや保護者への対応など、うまく行かなくても、冷たく見放されることが、往々にしてあります。教育実習時はまだ学生なので、指導してもらい権利があるのですが、就職した4月1日から誰も教えてくれなくなります。それでは、現場に出て困った時には、どうしたらよいのでしょうか？ とっておきのコツをいくつか伝授します。

★ 授業や学級運営をどうしたらよいか困った時

確かに、誰も教えてくれない冷たい教員社会なのですが、それというのも教師は自立心自負心がないと行えない仕事なので、たとえ若くとも教師としてのあなたを尊重した結果なのです。だからこそ、ほとんどの教員は「教えて欲しいコール」にコロッと参ってしまいます。「〇〇についてわからないので、教えていただけませんか？〇〇しようと考えているのですが、どうでしょう」と、礼をつくして聞いてみましょう。ただし、始めから全部教えてもらおうという態度や、毎日のようにしつこく聞くと、自分で考える事ができないと思われたり、あきれられたりするるので、程々に。

よくアンテナをはるといわれていますが、職員室のとなりの教員が何をしているかを、するどく観察しましょう。新人には思いつかない様な準備や、段取りを考えながら仕事をしている事が多いので、学ぶ事が沢山あります。その上でとても良いプリントなどを作られている時には、お願いして使わせていただくのも良い方法です。世の中はギブ&テイクですから、自分のプリントも見てもらい、いいわねという反応があれば、使ってもらいましょう。特に、学年の行事などでは、こういった交流がとても大切なのです。行事の時には、率先して身体を使う仕事を引き受けるのも一つです。

★ 授業参観をさせてもらう

新しい指導法を始めるとき、特に社会科系・理科系の教員の場合、自分の専門と相当離れた分野を教えなければなりませんから、フィールドワークや実験・実習のやり方に悩む時などは、同じ学年を同時に教えている教員がいれば、授業を見せてもらえないか頼んでみましょう。私も教員になって2年目に、自分の専門と全く異なる物理や化学の実験を担当しなければならなかった時、授業を見せていただき学びました。また、高校で初めて情報教室を授業に取り入れた時は、教頭に乞われて授業公開をし

ました。授業を見せていただく時は、上から視線のあら探しは禁物です。学ばせていただくという姿勢でお願いしましょう。批判心は当然あって良いのですが、そればかり前に出して発言すると、二度と授業を見せてもらえなくなります。良いところも沢山あるのですから……。というよりは、授業のやり方がわからないので見せていただくのですから、やはり、礼をつくしましょう。

★ 一人だけ仕事が期日に遅れてしまう

中・高の教員は、外から見るとずっとチームワークが必要です。幼稚園や小学校教員の場合は、クラス運営は基本的には担任一人なのですが、中・高の場合は、複数の教員で複数のクラスを見るのが大前提ですから、このところをしっかりと理解していないと、あちこちでトラブルを引き起こします。(幼稚園・小学校教員もチームワークは必要ですが…) 新人教師の場合、このチームプレーができなくて、行事の時に他の教員に置き去りにされてしまったり、そのクラスだけ重要な内容が伝達されてなかったりすることがあります。高校生くらいになって生徒が大人になると、「うちの担任だめだから」と、生徒が自ら他のクラスから情報を仕入れてきてくれたりします。しかし、優秀な生徒に頼りすぎるのも、あまり良い状況ではありません。だいいち、それほど気が利く優秀な生徒がいつもいるとは限りません。

どうしてこんな状況になるのでしょうか？新人のあなたがいじめられているのでしょうか。たまに、故意にいじめられる事も正直言ってあります。しかし、多くの場合は、あなたがアンテナを張っていない事に原因があるのです。あなたは、今までの学生生活の中で、クラスの他の学生が叱られているとき、自分に関係ないからと真面目に聞いてなかったりしていませんか？事務のガイダンスも「わからなければ誰かに聞けばいいや」と、真面目に聞いてなかったことがあります。卒論やレポート、実習のやり方を他の学生が直してもらっている時に、直されているところをきちんと見て自分は同じ間違いをしないようにしていましたか？実は、大学の事務職員も教員も、何度も説明しているのに、同じ事を一人一人言われなければ自分に言われたと感じてくれない学生に、正直言って困惑しています。となりの学生が言われている事を聞いていてくれれば、直せるはずなのに、なぜ聞いていてくれないのだろう、と悩んでいるのです。この状態のまま教員社会に入ると、例えば、学年主任はさっと職員室を見回して、担任がそろっていると思えば、「明日では間に合わないで〇〇のしめきりは今日にします」などと言って変更したりします。あなたが他の仕事に夢中になっていようがいまいがおかまいなしです。他の教員は、手を動かしていても耳は話ししている学年主任に向けられていますから、内容を理解しています。しかしあなたはどうでしょう？これが一人だけ置いていかれる原因なのです。例えば、ある教員が職員室のあなたのとなりの教員にあなたがわかる様な大きさの声で、特定の生徒の

情報を伝えていたとします。その話している教員は、あなたも聞いて理解してくれていることを計算に入れているのです。教員は、これらの情報をつなげあわせる努力をいつもはらう必要があるのです。

★同じ学年や公務分署の教員どうしのチームワークが大事

中・高教員の仕事に関しては、チームワークが大切ということは、前に述べました。特に担任業務には、チームワークが必要です。多少若くてもたもたしている教員が、担任グループに入っている、学年主任が少々力足らずでも、色々面倒見たがる教員がいたり、みんなで仕事をして乗り切ろうという雰囲気作りの上手な教員がいたりすると、良いチームワークが保たれ、いつもしっかり生徒を見つめている体制ができます。そうすると、生徒たちの力も十分発揮できるようになるのです。

一方、優秀な教員の集団であっても、チームワークが悪くお互いの足を引っ張ってばかりいると、生徒にもその雰囲気は伝わります。教員によって顔つきや対応を変える生徒が増え、教員の顔色を過度に見るようになります。教員の方も、他のクラスの生徒が多少問題行動をしても見て見ぬ振りをしたりします。そうすると、学年全体の雰囲気が殺伐としはじめ、生徒たちも本来の力が十分発揮できなくなりがちです。学年の学級担任は、その学年の授業を多く持つ傾向がありますから、学年を教えている教員集団のチームワークの善し悪しの影響は、学校以外の人間が思っているよりずっと生徒たちに影響するのです。

たとえ、若手の新人教員でも、チームワーク作りに一役かうことはできます。みなさんも是非、チームの大切な要になって、よい教師集団作りに貢献してください。

★あなたの学級に、手のかかる大変な生徒がいる（一人で悩まないで！！）

しじゅう小言を言わなければならない生徒、いつも見ている必要がある生徒は必ず何人かはいるものです。放っておくと、クラスが荒れる原因になったりします。また、おとなしくてもいじめられている可能性のある生徒、精神的な変調がある生徒（思春期に精神疾患を発病するケースが多いのも事実です）には、常に注意しておく必要があります。しかし、すべての担任が毎日自分の担任クラスの授業がある訳ではありません。主要3教科（英語・国語・数学）以外の科目の教員は、週に2-3時間しか担任クラスの授業がありません。そういう時にこそ、そのクラスを教える教師集団のチームワークが求められるのです。

常に見ていなければならない生徒については、学年会議にこそ出さなくても、職員室で話題にしておきます。前述の「アンテナ」が張られていれば、すべての担任教員が知っていてくれます。また、非常勤の先生方にもそっとお願いしておきます。複数の目で見ると、生徒の危機を救える事もあるのです。2年生以上であらかじ

め手のかかる生徒が複数いるとわかっている場合は、教務主任に相談して、クラスの授業をもつ教員をできるだけ担任集団から出してもらおうようにします。私は、以前この方法で何とか1年間切り抜けたことがあります。しかし、この方法も、担任集団の仲が良くないと使う事ができません。

★保護者とのトラブルになった。生徒の家庭背景が複雑である(一人で悩まないで!!)

保護者への対応が問題になってしまったりする事もあります。生徒の家庭環境やプライベートの問題で、どうしようもないこともあります(家庭内暴力、放置された精神疾患、妊娠、ストーカー、家族の犯罪、破産による夜逃げなど)。また、隠れたいじめや、教員がからんでいる体罰やいじめ問題も起こる事があります。売春、恐喝、窃盗などでは、学外に別組織がありつながっていることもあります。こういった事実がわかった時には、一人で対処してはいけません。プライベートな事の内容によっては、養護教員や信頼できる担任グループの教員、学校カウンセラーなどに相談します。学年主任にはそっと相談しておくともよいかもかもしれません(学年主任の性格によります)。ただし、体罰やいじめの当事者だったりする時は、他の教員と相談して管理職にそっと相談します。いずれにしろ、あなたが一人で悩んでも、何の解決にもなりません。ただし、こういう事は、結論を急いではいけません。若い教員は「誰も何もしてくれない」と自暴自棄になりがちですが、見守る事も大切な対処なのです。

教育実習の誰にも聞けない疑問に答えるコラム

教師(教育実習生)は、いつも見られている。

教師、そしてもちろん教育実習生も、いつも見られています。特に、地域に密着した公立中学校教員の場合は著しいといえるでしょう。こちらはわからなくても、道行く人のほとんどが、あなたを知っていると考えてもよいでしょう。だからこそ、学校外での私生活に気をつけてください。現場の教員になれば、大根を買う店の選択にも気をつかいます。同じ様な店が2つあって、両方とも保護者のうちだった場合は、両方で買い物をするといい気の使い方までしなくてはなりません。

教育実習生のあなたが、もし、地元の塾で講師をしているのなら、実習する期間だけでもやめる事をお勧めします。「あの先生、〇〇塾で先生してるよ」といったことが生徒からでれば、教育実習にさしさわります。

教育実習中の休日に地域でデートするのも、控えた方がいいでしょう。まして、パチンコ屋やゲーセンに出入りしたりするのもNGです。派手な格好で休日で歩くのも控えましょう。現在担当している生徒の保護者の店には、できるだけ行かないようにした方が無難です。

大変面倒なのですが、教員というのは、そういう仕事なのです。

教師論⑪新聞に載るような社会問題、特に教育問題については知るべきである

教員になると、毎日が忙しくて、授業の用意と雑用におわれがちです。しかし、新聞に載る様な社会問題には必ず目を通し、ニュース番組も「ながら」見でよいから見るようにしましょう。

学校は社会の縮図です。社会問題は、すぐ学校を直撃します。そのとき、よくわからないでは、やはりプロとして失格でしょう。目の前の学校の事だけやっていけば…という発想では、時代遅れとも言われますし、何よりも、生徒を取り巻く環境を理解できなかったり、対処を間違えたりします。例えば、生活保護の対象の変化が現在話題となっていますが、現在生活保護を受けている家庭を直撃する訳ですから、就学不能になる生徒も出てきたりします。風疹の流行・感染のようなことでも家族の不和の原因にもなり、そのことが生徒に影響する事があります。例えば、生徒の姓と一緒に住む母親や父親の姓が違うとき、あなたはどんな風に思いますか？社会の第一線で働くキャリアウーマンの家庭では、夫婦別姓を望む人が多くいます。こどもを生む時だけ入籍し、すぐ離婚して事実婚を続けている人たちも居ます。一方で、借金を逃れるために離婚している場合もあります。そういった社会問題を知らないで、生徒の姓について不用意な発言をすると保護者の指示を失います。すべての社会問題が、あなたの目の前の生徒に関係してくるのです。

特に教育問題は、いつも社会問題のトップに入っています。学力低下問題、いじめの問題、学校の安全性の問題、災害時の学校の対処の問題、体罰の問題、スクールカースト、教職員の退職金の切り下げ問題などは、この数年間に話題になった問題です。授業時間の増加、教員免許6年制度、考察力を伸ばす教育への転換、英語学習の強化（高校の英語授業は英語で行うなど）、PISA的な学力強化、フィンランド方式の教育、センター入試の見直しと高校能力試験の導入、教育委員会の改革、教員の年齢構成のいびつさなどは、文部科学省や教育再生会議でこのところ話題になっている事項で、新聞をにぎわせた事項です。聞いただけでわかりますか？これらの事項も、教育に興味を持っている保護者から質問が出てくる事があります。良く知りませんか、それって何ですか？といった返答は、教師として恥ずかしいと思います。何もあなたの考えを詳細に述べろとはいいません。さりげない返事でもよいのです。しかし、的確な回答が必要だと思われれます。ですから、これら、新聞にでるような教育問題に付いては、やはり、知っておくべきでしょう。

ひとつ誤解しないで欲しいのは、保護者への対応のためにだけ、新聞を読みニュー

スを聞いて欲しいとっている訳ではないということです。学校は、社会から隔離した特別のクリーンな空間ではありません。学校は社会のミニチュア版であり、生徒たちは自分ではほとんど生活能力がないため、自分個人の能力で人生を切り開ける段階にはまだなっていません。そのため家庭環境や社会の情勢が、大人の社会よりもより濃縮した形で生徒の上に現れがちなのです。だからこそ、生徒に向き合うべき教員は、社会情勢に敏感でなければならないのです。

教育実習の誰にも聞けない疑問に答えるコラム

ちょっと待って！ツイッターやFB, 飲み会の会話には注意しよう

前回、教員や教育実習生は、いつも見られていることについて述べました。この項目は、その延長です。しかも、近年あなたたちにとって必要不可欠の存在になっている SNS やメールなどの通信手段へ、もっと注意深くなくて欲しいという警告です。パソコンやスマホに向かっていて、何でも気軽に言えてしまうような気がします。相手の顔が見えませんから、相手を傷つける様な言葉も平気で言えてしまいます。あなたはコミュニケーションをとっているつもりでしようが、自分に同意してくれる回答だけ残し、嫌な返答はすぐ消してしまうことができます。これって、本当にコミュニケーションと言えるのでしょうか？一方向の都合の良い言いつばなしではないのでしょうか？

ツイッターで自分の本音を言うのは、あまり賛成しません。自分の一時の感情の爆発を世界に発信してしまう事となり、取り返しがつかないのです。自分の私生活がすべてわかってしまう様なブログの書き方も注意しましょう。ついうっかり職員会議や生徒との事を書いたりすると、守秘義務違反になったりします。

例えば、「飲み屋ナウ。となりの席に去年卒業したかわいい子がいた」なんて書いたらどうなるでしょうか？見た人にはどんな飲み屋かわかりません。明らかに未成年の卒業生と何をしているのか？という事になります。向こうは保護者と一緒で、ソフトドリンクを飲んでいたなどと後から言っても誰も信じてくれないのです。

飲み屋と言えば、飲みながらの会話にも注意しましょう。飲むと気が大きくなりますから、声も大きくなります。私の友人の教員の中には、絶対個室でしか飲まないという人も居るくらいです。もし、泥酔したら、狭い町なら、あの学校の若い先生がべろんべろんになって、教師のくせに店を汚した…などという噂が、次の日には町中に広がっています。一昔前なら、お酒のにおいをさせて朝教壇に立つ教員もいましたし、あきれられておしまいでしたが、今の教員をとりまく環境は、そんなにゆるくありません。お酒はほどほどに。

教師論⑫生徒のおかれている環境と実態を理解するということ-簡単に決めつけないで-

前述のように、閉鎖した学校空間で生活していると、狭い世界での常識にしばられがちになります。本来の家庭環境や、それぞれの生徒が置かれている立場を良く考えないで、例えば「給食費を払わない生徒＝だらしのない家庭」「朝保護者が寝ていて生徒も遅刻や朝食抜きが多い＝生活習慣が乱れている」といった様子で決めつけてしまうと、そうでなくても家庭内外で、自分の努力の限界を感じ自暴自棄になっている生徒を追いつめる事になります。現在、給食が唯一のまともな食事という家庭は、あなたが予想するよりもっと沢山あるでしょう。中学生でも大切な家庭内の働き手である場合もあります。高校生のアルバイト代が、家庭の主要な収入源という場合もあります。給食費を払ってもらいたいと生徒たちが考えていても、保護者が賭け事に使ってしまうという家庭もあるでしょう。保護者が夜働いていて、朝起きられないという事を、生徒のせいにしたらかわいそうです。以前、あまりにも遅刻が多い女子高校生に事情をきいたところ父子家庭で小学生の妹・弟が居て、また、認知症の祖母がいて、そういった家庭内の仕事がすべて、高校生の彼女の肩にかかっているとのことでした。朝、妹・弟にご飯を食べさせ、父親と祖母の昼食を作り、登校すると始業時間に間に合わないとのことでした。こういった場合、教師はできるだけ励ますと同時に、学校生活だけに目を向けないで、生活を成り立たせるためのあらゆる可能性を共に考えてやらなければなりません。

いじめられている時、家庭内暴力や家庭内不和に悩んでいるとき、妊娠してしまったときなど、生徒たちはかなり追いつめられています。冷静に外側から見るとたいした事に思えなくても、当事者にとっては、とてもつらい事なのです。家庭がひどい状態ならば、他の生徒のいじめがひどければ、教員や警察に相談すれば良いとか、逃げれば良いとか、無視すれば良いという大人の理論は生徒には通用しません。それを「たいしたことないのに一人で悩んでいる」と簡単に決めつけてしまうことは、どうでしょうか？それは、ストーカーやセクハラで苦しんでいる人に、そんなことたいした事無いとか、挑発的な服装をしているからだと言うことと同じように理不尽なことと言えるでしょう。教師は生徒たちの、当事者の気持ちになる事が大切です。特に近年は、学校に競争概念が必要以上に入り込んでおり、教員が上記の様な生徒の悩みに寄り添いづらくなっている様な気がします。すべて〇×の二元化の評価をされ、順位をつけられ、生徒だけでなく、教員も順位をつけられています。自分の順位を少しでも上げるために、生徒の事より、見かけの指導力（学級を見かけ上、上手に運営するとかの

指導力)を高く評価されることを選択しがちです。しかし、必要以上の競争心の導入は、教師から暖かい心を奪い、生徒を深く理解しようという余裕を奪います。こういった風潮も、生徒を追いつめる要因の一つなのです。特に思春期の生徒たちを相手にする中高の教員は、自分の考えを押し付けるのではなく、生徒の心の成長を手助けするという、長く暖かいまなざしの支援が必要なのです。

思春期の生徒たちは、家庭から大人から卒業して自立しようともがいている訳で、思春期特有の心の揺らぎは、その時代を過ぎてしまうと、あんなことでなぜ悩んでいたのだろう、もっと気軽に考えればよかったと、と思える時代がくるようにもなります。それは多くの体験を通して、人として生徒たちが成長した証なのでしょう。どれほど人と違う困難があっても、それを超えたあとの成長は、困難の質にかかわらず大きなものです。教員はその成長を励ましてやるのが肝心です。逆に言えば、**困難は本人が全力で乗り越えるしか解決方法がないのであり、教員はそれを励ますことしかできないのです。**

教育実習の誰にも聞けない疑問に答えるコラム

生徒に先生の家に行きたいって言われた。オレってモテる教員なんだ！

教育実習校があなたの卒業校であると、あなたの自宅にも近いかもしれません。生徒と色々な話をするうちに、「せんせいのうち、いきたーい！！」というような事を言われる事があります。お！！、俺ってモテるんだ…などと考えて、ホイホイ自宅に連れて行ってはいけません。また、授業の中で例えば市の資料館の話をしたところ、生徒から「せんせい、連れて行って！！」と言われたとします。なかなか勉強熱心だなと思って連れて行く…これもNGです。

あなたは教育実習生である間は、学生なのです。生徒たちへの責任はすべて学校にあるのです。生徒と合う場所は、学校の指定された場所に限るべきです。特に男子学生は、女子生徒をたとえ家族が居ても自宅に呼べば、あるいは女子学生が男子生徒を呼べば、あらぬ噂を立てられたり、場合によっては予想外にセクハラで訴えたりされることもあるのです。相手にされない腹いせにセクハラで訴えられたという例もあります。資料館のような公の場所で勉強するために会うのはいいだろうと、思いがちですが、正規の教員でも生徒を外に連れて行く時には、職員会議の許可や校長の許可を得るなどの正式の手続きが必要です。教育実習生が勝手に連れ出す事など問題外です。

生徒の方からも、成績判定に関与しない歳が近い教育実習生は魅力的に見えるでしょう。しかし、生徒たちがぺたぺたよってきたからといって、安易な行動は慎むべきです。注意しましょう。

教師論⑬ 学校・教師の説明責任（アカウントビリティ）をどう考えるか

アカウントビリティとは、もともと企業が株主に対して、財政・方針などを説明する説明責任として生まれてきた言葉ですが、学校に関しては、学外に対する学校や教師の方針や会計についての説明責任だけでなく、情報公開も含めた、学外に対する説明責任すべてについて言っているようにも思えます。

それにしても、現在の大学を含む学校に対する「情報公開」の要求はエスカレートし過ぎの面があると思います。というか、ポイントがずれているのではないのでしょうか？例えば、「うちの息子の今日の状態に付いて知りたい」という気持ちはわかりますが、そのために小中の教員が、毎日全員ひとりひとりについての成績をつけなければならないというのは、行き過ぎであると思います。評価とは、1日の成果でつけられるものではないはずで、「総合的に評価する」という言い方は、あいまいでよくわからないと言われますが、すべて点数化、デジタル化する必要はないのです。曖昧な評価というものも存在しているのではないのでしょうか。また、学校の様子が知りたいという要求に対して、毎日学級通信を相当無理して書いている教員もいますが、私は、生徒に自習させて、その間に学級通信を書くのを日常としている先生を知っています。私が保護者だとしたら、その時間、生徒に接して欲しいと思うでしょう。何事もほどほどです。

一方で、教師が絶対おこなわなければならない「説明責任」もあります。第一に授業計画です。あなたの授業が教科書と大幅にはなれた時には、どういう意味があつてこういった授業計画でおこなっているかを、生徒にはかならずつたえましょう。保護者から要求があつた場合は、生徒に伝えていることを述べた上で、再度説明しましょう。授業構成と、どのように教えるかは、教員に与えられた大切な権利です。ただし、常に、自分の授業を振り返り、自画自賛ではなく、良いところと、悪いところを分析する習慣をつけましょう。新人の時は、それほど問題は無いのですが、数年たってしまうと今までの経験の上にあぐらをかいてしまいがちです。しかし、生徒たちをとりまく環境は、毎日変わっていきますし、生徒たちのあり方も変わっていきます。なれてきて努力をしなくなることは、とてもこわいことなのです。実際クラスが異なると、同じ構成の授業でもうまく運ばなかったりします。100回授業をして、ああ今日うまくいったという授業は、10回もあればいい方だと思います。ああ今日はここが今ひとつだったとか、次はここをこうかえてみよう、と、考えるのが普通なのです。それでも、自分の授業の成果を見ながら、授業構成を変

化させつつも、自信をもって授業構成についての説明をしましょう（ここでは自信をもって主張してください）。

もう一つ、説明責任を果たさなければならない時があります。学級崩壊しかけた時、いじめや盗難の問題が起きた時、飲酒などで生徒が公に処分された時などです。プライベートなことで秘密を守らなければならない時もありますが、隠さないで正直にのべて、保護者にも報告し、協力をあおぎましょう。緊急保護者会が必要な場合もあります。もちろんこういった内容では、管理職にも説明に参与してもらう必要があります。

学校の専任になり、担任を持つと「指導要録」という書類を年度末までに書く事になります。ひとりひとりの生徒の成績、行動の記録、総合所見など、家庭環境から、健康状態まで、門外不出の総合情報です。公共心や協調性の有無などの行動の記録の評価をするのは、各学年の担任であり、これが相当担任によって評価が変化するのは、この指導要録の中身は、基本的には部外者は見る事ができません。ただし、調査書（いわゆる内申書）は、これから転記するということになっています。しかし、あまり低い評価の「行動の記録」は調査書には書かないのが普通ですので、必ずしも、指導要録と同じとはいきれません。最近、この指導要録の公表を求めるとの裁判がおこされ、公表せよとの判例がでています。成績と異なり、「行動の記録」の評価には、教師の主観が相当は入ります。どちらにせよ、他者から見て問題ない様な公平な評価を、教師は心がけるべきです。

教育実習の誰にも聞けない疑問に答えるコラム

なつきすぎる異性の生徒への対応—男子教育実習生よ、異常にフレンドリーな女子には注意せよ！！

教育実習先では、あなたがもっとも若いちょっと年上の男子です。思春期の中学・高校生の女子にとっては、自分たちの閉じられた空間にはいつてきた教育実習生は、すこーしあこがれの存在であるし、成績が関係ない分、好きな事が言える相手です。はっきりいって、男の子でさえあれば、どんな人でも女子中高生に一方向的に思われる可能性があるのです。自分のことをイケメンと心密かに思っているあなたならなおさらです。何度も個人的に話かけてくる女子生徒と、いいコミュニケーションをとろうとフレンドリーに相手をしていると、他の男子生徒や女子生徒から、ひいきをしているという目で見られます。特別に一人の相手をするのは、やはり良くないのです。また、これはまずいと思って後から距離を置くと、「あんなにフレンドリーにしてくれた教育実習生の先生が、私をうらぎった」という事になります。こうなった時の思春期の女子は、かなり怖い行動に出ることがあります。ボスのな女子ならば、他の子を誘導して授業妨害をしたり、あることないこと教員や保護者に訴えたり、良くあるパターンが、やってもいないセクハラで訴えられることです。こういった被害にあった教育実習生が、実際にいます。それでは、どうやって防げばよいのでしょうか？まず、最初から特定の女子とフレンドリーな会話をしない事です。特に授業中は、「先生のネクタイかっこいい」とか話しかけられても、無視して取り合わない事です。

実は、正規の教員になると、女子生徒だけでなく、保護者との関わりでもこういった間違いが起きる事があります。最初から割り切って、あっさりとした対応をこころがけましょう。

上記では、よく起こりがちな男子学生にだけ言いましたが、最近は女子学生でも同じ様な傾向がありますので、注意しましょう。

教師論⑭ モンスターペアレントなんて怖くない?! 本当にその保護者はモンスター?

モンスターペアレントという言葉が定着してだいぶたちます。たしかに、理不尽なことをいう保護者もいますが、実は昔からそういった保護者は多少はいました。しかし、保護者会などでむちゃくちゃな発言をする保護者がいると、他の保護者がちゃんととめてくれたものでした。このことは、外で法律をやぶったりゴミをすてたり態度が悪い子どもがいると、昔はその場でご近所の大人が注意してくれたものですが最近はだれも注意しなくなったことと、共通の悩みです。

子どもたち本人に何も言わずに、子どもたちに関することでも当の学校の生徒かどうかわからなくても、すぐ学校に通報してきますし、担任の教員に関する事でも直接校長や教育委員会に届けてしまいます。人と人のコミュニケーションに自信が無い人が増えたのでしょうか。

子どもの数が減り、保護者の目が自分の子にしか向かなくなったのは事実ですが、保護者に何か言われる事＝モンスターペアレントとは思わないでください。保護者の意見には、正当な疑問や要求もあるのです。また、内容は正当であっても、言い方が乱暴だったり、人を傷つける様な言い方と言ったりする場合があります。いずれにしろ、教師は、冷静に、内容を吟味して相手の立場を考え、誠実に答えるべきでしょう。しかし、間違えてはいけないのは、教師たるあなたが気をつけなければならない事は、保護者の利益を優先する事ではなく、あなたの生徒を守る事なのです。子ども（生徒）が大切であるという点において、保護者も教員も一致点はあるはずですが、そう思えば、正当な内容の疑義ならば、話し合えるはずですが。たとえ結論はつかなくても、分かり合えるはずだと言う前提で、話し合うのが筋でしょう。しかし、自分一人で解決できない時は、まず学科主任、次に管理職に相談して手をかしてもらってください。こじれてしまうと厄介なので、早めの対応が必要です。

もうひとつ注意しなければならないのは、保護者は学校の事をコミュニケーションのプロがあつまっている公共施設だと思っていることです。実は私は、教員になって2年目のまだ20歳代の未婚の時に、保護者（母親）から家庭の不和の相談を受け、どうしていいかわからず「はあー」としか答えられなかった事があります。今でこそ、生徒の理解をするには家庭環境を理解することも大切だということがわかるのですが、その頃は、本当に困ってしまいました。よく考えてみれば、専業主婦のおかあさんにとって、夫との不和を家族はもちろん実家や親戚に訴えればもう後に引けなくなるし、口さがないご近所に相談する訳にもいかないし、となると、お

金がかからない秘密が守られる安全な相談先としては、学校の教員が一番だったの
でしょう。保護者のカウンセラーの役割までは、教員にはできないのが本当のところ
なのですが、その判断がつかないまま、保護者のこんな要求にも応えなければなら
ないのかという思いが当時の私にはありました。

近年は保護者の働く環境が悪化し、リストラされたり、ストレスをかかえたり、
保護者の心のありようも、決して安泰な状況ではないのです。わずかな事でも学校
に甘えてみたり、あたってくる保護者もいないわけではありません。一方で、学校
という組織のしきいも昔に比べて低くなったのでしょうか。多くの学校は、それを承
知で保護者や地域の人々の苦情の受け皿になっているようです。地域に密着した市役
所や病院も、同様の役割を果たさざるをえない状況になっているようです。学校は、
すぐ対処しなければならない組織的ないじめの問題や非行の問題、学級崩壊などを、
保護者の苦情の中からきちんと区別して整理し、対応していく必要があるでしょう。
ただしこれは、一教員ではなく学校全体の問題です。

若干精神的に不安定になった程度の保護者への対応なら、一人の教員でも充分で
きる事なのですが、ごくたまにですが、学校だけでは対応しきれない場合があります。
暴力団関係などから無茶な要求がされる時、生徒や教員に危害を加えるといっ
たおどし、あるいは重度の心の病気から妄想を持ち、他の生徒や教員に危害があり
そうな場合は、教員一人で抱え込む問題ではありません。管理職を中心として学校
内外で取り組み、一日も早い解決が必要です。

教育実習の誰にも聞けない疑問に答えるコラム

親しい先生と特別に親しくならない

当たり前だとおもっているでしょう？また、何の事かとおもっているかもしれません。しかし本学学生が教育実習に行くときは、たいてい出身母校です。なつかしい先生方がたくさんいます。中には一緒に飲みに行く先生もいるでしょう。私の教育実習先は、出身校ではなかったのですが、実習先の指導教官は、前から知っている私が非常に尊敬する先生でした。複数の教育実習生がいましたが、はっきり言ってみんな先生と一緒によく飲みにいきました。

しかし、ここに落とし穴があります。実習生も複数ではなく、一人の場合もあります。高校生の時赴任したばかりの若い先生と今度は生徒-教員の関係ではなく、なんとなく対等のようなきがしてしまいます（本当は指導教員なのですが）。けっこう、さっかくから恋愛関係の間違いがおきることもあるのです。恋愛は自由ですから、実習さえ終われば、真剣なら問題は無いのですが、不倫だったりするのは、やっぱり問題となるでしょう。双方に問題があるものの、教育実習生の立場を考えるべきだと思うのです。

また、女子の教育実習生は（最近では男子でも）不用意に個人的に指導教員の家や、一緒になった教育実習生の家に行ったりしないようにしましょう。誤解されるおそれがあります。会うときは、たとえ日曜日でも、かならず実習校で、あるいは、カフェのようなオープンな場所で打ち合わせなどをしましょう。

教師論⑮教師は踏み台である。見返りを求めてはいけない

教師は、新米だろうがベテランだろうが対等な立場なので、対等な能力を要求される、といった類いのことは、何回も説明してきました。それでも、ベテランの先生の中には、本当に人気のある先生がいます。誠実な方で、授業内容も良く、といった尊敬できる先生の場合もありますが、どう見ても「教師としての利権」を利用するのが上手で、クラスや教員を管理するのは上手ですが、授業内容がそれほどいいとは思えず、といった先生で、なぜか、管理職にも、保護者にも、一部の生徒にもチャホヤされている……といった先生もいるのです。新人には、そういった先生が、とても羨ましく見えるのも事実です。

教師としてどういう生き方をするのかという覚悟は、教師になった後に、いずれかはしなければならなくなります。①生徒の生活指導に全力をかける②教科やクラブ活動で飛び抜けてできる才能のある生徒を伸ばしてやる③特にできない生徒に特別に丁寧に勉強を見てやる④学校の評判を上げる様な事に命をかける⑤いじめを減らす学級作り⑥自分ならではの教材研究 などなど、あなたが教員として一番力を入れる場所というのが、おのずから決まってきます。そのころになると、これだけがんばっているのだから、正当な評価をしてもらいたいという期待が膨らんでいきます。しかし、自分の期待する様な評価がすぐ得られるわけでもなく、こんな事やってられるかという気にもなります。

私ごとで申し訳ないのですが、教師になって2-3年たったころ、教師としてどういう生き方をするかで悩んだ事がありました。受け持っているクラスの生徒が期末テストで上手に点が取れるような、平均点があがるような指導は、やろうと思えばできるようになりました。しかしそんなことばかりしていると、時間が足りなくて、本当に生徒の考える力をのばせるような、また、生徒を自立させられるような授業はできません。でも、点数のとれるよい先生という評価は欲しい。評価されないと報われないと、その時は、感じていたのです。

ちょうどその頃、大学時代の指導教官と飲む機会がありました。今はもう亡くなっている先生ですが、沢山の弟子を大学・高校の教員や技術者に育てている先生でした。ところが、酔うほどに、その先生は有名になった教え子の卒業生、つまり私には先輩にあたる人の評価を始めたのです。いわく「あいつは教授になっているがまだ自立していない。自分の研究ができない」「あいつはまだ若いがもう独り立ちできている」という具合です。私は正直行って真っ青になりました。その時最後に先生が「おれには

沢山弟子がいるが、独り立ちできている弟子はまだ少ない。俺の力がないせいだなあ」とおっしゃったのです。私は愕然とするとともに、人を育てる仕事というのはそういうものなのだと、ガツンと殴られた気がしました。その日から、私は迷わず、「すぐ点をとれる方法を教えてくれればいいのに面倒な先生だ」と言われてもひるまず、「将来の成長のために、こういった考えさせる授業をするのだから、面倒でも自分たちで考えなさい」という授業をやりつづけ、「10年後の自分のために現在の自分に投資しなさい」と生徒や学生に言い続けています。私の授業のしかたはかなり自己満足だとは思いますが、教え子には考える習慣をつけてもらって、一人一人に自立してもらいたいのです。

人を育てる仕事とはまさに踏み台になる事であり、生徒の自立が成功すれば教師は必要なくなる存在です。見返りはどんな形でも無いと思った方がよい、実にむなしい仕事です。だからこそ、自分自身の教師としてのアイデンティティが必要なのです。もし、見返りがあるのだとしたら、それは自立して去っていく生徒や学生たちの後ろ姿なのでしょう。

教育実習の誰にも聞けない疑問に答えるコラム

さあ教員になった。そして、現場に出たら半人前なのにだ一れも教えてくれない。え？
教育実習生なのに、教えてもらえない？-教師は自立すべし-

何回も言うようですが、教育実習の時は教師であると同時に学生でもあるのですから、指導教員がいて、間違いがないように指導してくれます。ところが、いったん教員になると、だれも教えてくれない世界が待っています。本当の学校は忙しい事もあります、とても冷たい場所に思えます。また、事実、教師集団というのは、けっこう、意地悪に見えます。意地悪という用語がありますが、要するに、新人でも教員免許を持っている以上、一人前としてあつかうという事なのです。インターン時代もなければ、上司というの、校長・教頭以外は、事実上いません。ようするに対等だから、だれも面倒見てくれないのです。教師の教育する自由という権利は、侵害してはいけないものだと皆思っていますから、特別に頼まれなければ、絶対手は貸しません。学校内の習慣の様なことは聞きながら行動してかまわないのですが、授業をどうしようとか、クラス運営の事とかについては、もちろん相談して良いのですが、「何から何まで教えて」といった態度でのぞむのは、やめましょう。教師としての主体性がないと思われます。

教育実習になれていない指導教員だと、教育実習生に対しても放任主義の態度の先生がいたりします。若い指導教員で、初めて教育実習生を指導する場合は、教育実習生の指導というのが、どういうものかよくわかっていない場合もあります。例えば、3週間実習があるのに、研究授業以外一回も授業をさせてくれないという指導教員もいたりします。学習指導案にしても、授業の構成にしても、色々なやり方があるのですが、自分が教育実習で教わったやり方と、順番・形式なども含めて、逐一同じでなければ許せないという指導教員にあたる場合があります。「私の教育をうけた大学ではそうでなかった」という叱り言葉を連発するのは、若い指導教員にありがちなことで、指導教員としての経験が少ないので、本人もてさぐり状態なため、自信が無いために起こる事なのです。そう考えれば、あなたが指導教員のやり方に怒る事も無くなると思います、あまりにも、指導に問題があると感じた時は、深刻な状態になる前に、大学の実習指導教員に相談してみてください。しかしこれは、最後の手段です。そんなことがないことを、祈っています。

教師という仕事-教師論-

著 者： 中井 睦美

発行所：大東文化大学 教職課程センター

東京都板橋区高島平 1-9-1

発行日： 平成 29 年 2 月 28 日

印 刷： 株式会社サンワ

TEL_03-3265-1816



